

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.287

2017年4月

平成28年度卒業式を挙行



目次

●ニュース	
平成28年度卒業式を挙	3
TGU Symposium in Nagoya 2017～指定国立大学を目指して～を開催	12
短期日本語プログラム（NUSTEP）2017年春季の受入れを実施	13
平成28年度「PhD プロフェッショナル登龍門」シンポジウムを開催	13
平成28年度名古屋 COI 拠点成果発表会及び公開シンポジウムを開催	14
2016年度学生論文コンテストの表彰式を挙	14
天野・小出共同研究ラボを開	15
平成28年度「赤崎賞」表彰式を挙	15
第5回水田賞授賞式を挙	16
平成28年度卒業・修了留学生を送る夕べを開催	16
名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ調印式を挙	17
天野 浩教授が上海において講演会を開催	17
●知の先端	
強レーザー場であやつる原子・分子	18
菱川 明栄（物質科学国際研究センター教授）	
●知の未来へ	
がんを見つけて破壊するナノ粒子の開発	20
林 幸彦朗（未来材料・システム研究所助教）	
●学生の元気	
平成28年度名古屋大学総長顕彰 7名2団体を表彰	21
平成28年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	23
●部局ニュース	
最新式手術支援ロボット“ダ・ヴィンチ Xi” 寄贈目録受領式及び感謝状贈呈式を挙	26
公開シンポジウム「文学研究科のこれまでと、これからの人文学研究科」を開催	27
モンゴル国立教育大学と比較授業分析共同セミナーを実施	27
教職を志望する名大生のための「高大接続」セミナーを開催	28
第4回キャンパス・アジア学生シンポジウム等を開催	28
テクノ・シンポジウム名大「マルチコプター 2.0時代へ『空の産業革命』を迎えて」を開催	29
オハイオ州立大学 TDA と学術交流協定を締結	29
ICCAE 第7回オープンセミナーを開催	30
第6回シンクロトロン光研究センターシンポジウムを開催	30
第34回企画展「誇張なきアートー科学記録にみる美」を開催	31
ポタニカルアート実演「植物を記録する」を開催	31
第52回地球教室「鉱物をさがそう！」を開催	31
●資料	
平成29年度名古屋大学組織図	32
●受賞者一覧	33
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成29年2月16日～3月15日	37
●イベントカレンダー	39
●ちょっと名大史	
宇宙地球環境研究所（後編）― 附置研究所の歴史③ ―	40

平成28年度卒業式を挙





平成28年度名古屋大学卒業式が、3月27日(月)、豊田講堂において挙行されました。

午前9時30分から修士・専門職・博士学位記授与式が、続いて午前11時50分から学士学位記授与式が行われ、会場は卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で式典が始まり、松尾総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,598名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)修了生45名に専門職学位記が、医学博士課程及び博士課程後期課程修了生244名に博士學位記が、また、学部卒業生2,172名に学士学位記が、それぞれ授与されました。

総長は、修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことばを贈り、激励しました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

次に、修了生及び卒業生を代表して、大学院創薬科学研究科博士課程後期課程修了生の長坂理紗子さんが、また、工学部卒業生の丹 裕也さんが、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

また、来賓として、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社名誉会長)より心のもった祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

最後に、名古屋大学混声合唱団が、送別の歌として学生歌「若き我等」、「青空が青かった」を合唱、続いて「蛍の光」を全員で斉唱しました。式典は、

名古屋大学交響楽団による「交響曲第1番第4楽章」(ブラームス作曲)の演奏とともに幕を閉じました。

卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと記念撮影をする卒業生の姿があちらこちらで見られました。

卒業式の様子は、豊田講堂アトリウム及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ(http://www.nagoya-u.ac.jp/info/28_4.html)で視聴することができます。

平成28年度大学院修了式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

名古屋大学を卒業される皆さん、本日はご卒業、誠にめでとうございます。本日ここに、学部学生2,172名と、大学院の修士及び博士課程1,887名、合わせて4,059名の皆さんが、名古屋大学を卒業します。皆さんはこの名古屋大学で、指導者の先生、友人、先輩、後輩など、多くの人と知り合い、切磋琢磨して本日を迎えられました。また、長い間皆さんを暖かく支えてくださった、ご両親やご家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げたいと思います。

皆さんは、名古屋大学大学院での厳しい課程を終え、この卒業式・修了式に臨んでいます。いま、皆さんはどのような気持ちでしょうか。名古屋大学のキャンパスで過ごした大学院の日々を思い起こしてください。特に研究活動では、苦しく苦い経験も数多くあったことと思います。それら乗り越え、本日を迎えられた皆さんは、より人生の目的を明確にしてこれからの新しいチャレンジを始めようとしています。そのような皆さんに、私は大いにエールを送りたいと思います。

卒業式にあたり、総長として皆さんに饒（はなむけ）の言葉をおくりたいと思います。メッセージは極めてシンプルです。私の想いは、皆さんに「勇気ある知識人」として、これから大いに活躍していただきたい、ということです。名古屋大学の憲法ともいえる学術憲章は、今から17年前の平成12年、即ち西暦2000年に定められました。その中で、名古屋大学の教育の目標を、「勇気ある知識人」を育てること、としています。勇気ある知識人とは何か、あらためて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

20世紀の終わり、私たちは新しい世紀を迎えるにあたって、多くの期待を抱きました。すなわち、科学技術の飛躍的な進歩により、人類社会はより豊かになり、多くの人々がその果実を享受して幸せに暮らせるのではないか、という期待です。しかし、21世紀に入ってからの世界は、それまで私たちが想定していた範囲をはるかに超えて、大きく揺れ動いてきました。21世紀初頭の2001年にはアメリカで大規模なテロが発生、その後も世界で大きな出来事が連続して発生しています。ここ1、2年をとっても、世界を揺るがすような大事件が次々と起きていることは皆さんご承知のとおりです。

最近多くの国や地域で台頭してきた保護主義やポピュリズムは、今後世界の在り方を大きく変える可能性があります。この根底には、拡大し続ける貧困や格差の問題があり、また様々な紛争に巻き込まれた多くの難民の問題がありま



す。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の公式発表によると、2014年時点で、世界中で移動を余儀なくされている人、すなわち避難民は約6千万人おり、このうち1年間で新たに強制移動させられた人の数は約1,400万人と報告されています。実にこの5年間で4倍に膨れ上がっています。見方を変えると、毎日4万2,500人の人が家を失い、世界で122人に一人が避難生活をしているという現実があります。

自国の利益を最優先する政策はその国にとってあたり前のことではありますが、一方でグローバル化した現代にあっては、世界的な調和がなされなければ、社会のゆがみは増大し、世界の不安定さはどんどん増していくでしょう。ひいてはそれが自国に跳ね返り、結局は人類全体にとって大きな不利益になることは十分想像がつきます。格差の拡大や難民の増加は、保護主義やポピュリズムの台頭に大きな力を与えているといえるでしょう。ポピュリズムは、論理的な思考よりも、情緒や感情により行動に走る傾向が強く、それが政治の世界でより大きな力をもってきているのが最近の動きであると思っています。

私たちは知識人として、科学的な論理性と高い志に裏打ちされた高度の知識や技術で、世界の人たちが自由に交流し、ともに発展していける社会を作るよう、努力する義務があると思っています。

21世紀の世界はこのように、将来の予測が大変難しい、複雑で変化の激しい時代です。そのような時代にあって、「勇気ある知識人」とはなにか、私の考えを述べたいと思います。

第一は高い志を持って主体的に行動する人です。人はなぜ人たり得るのか、難しい問題です。しかし、人はどのような時に生きがいを感じるのか、と問うた時、私自身は、「人の幸せに貢献できた時、あるいは社会のために貢献できた時」、そして「それが主体的な行動でなされた時」、というのが答えではないかと思っています。

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生し、未曾有の被害をもたらしました。この時に名古屋大学附属病院の病院長をつとめていた私は、職員と一緒に支援助にあたりましたが、その時の経験は、私の人生の中で極めて大きなインパクトがありました。名古屋大学だけではなく、日本中の人たちが被災地の支援や復興のために、心を一つにして働きました。被災された方々のために何かをせずにはおれない、そのような思いが日本中を突き動かしたと思います。人のために何かをしたい、社会のために貢献したい、という思いを持ち、そのような思いが実感できた時の喜びや感動は、何にもまして大きいものであったと思います。現代における「勇気ある知識人」は、人の幸せや社会の発展のために貢献しようとする高い志と、主体的にかかわる意識をもつこと、これがまず大切であると思います。

第二は、多様性、即ちダイバーシティへの理解、許容、そして共創、ということです。これまでも述べてきたように、私たちの社会はグローバル化し、国や人種、文化や習慣、宗教や考え方など、異なる属性を持った多様な人々が交流を深めながら、今この瞬間も新しい歴史を作っています。これまで名古屋大学はキャンパスの国際化を進めて来ましたが、また女性の活躍促進も積極的に推し進めてきました。留学生の数は毎年増えており、世界100か国から留学生を受け入れています。正規の留学生だけでも全学生の10%を超えています。また名古屋大学から海外へ出かけていく学生は急速に増えており、短期長期合わせると、昨年度（2015年度）は1,000名を超えています。これは2008年度が146名であったのに比べれば、7倍になっています。ややもすると、内向きだといわれがちな名大生は、この10年で大きく変わりました。全体として、名古屋大学は多様性に富んだ活発なキャンパスに変貌したといえるでしょう。

数の変化だけではなく、このようなキャンパスでは質の変化も起こります。名古屋大学では多様性をじかに触れることのできるチャンスが飛躍的に増えるのです。単なる知識の世界から、自分の目で見、体で感じて得た生の情報は、皆さんのこれからの人生に大きな財産となると思います。

「勇気ある知識人」の三つめの要素は、「前に一歩足を踏み出す勇気を持つ」ことです。これから皆さんがどのような進路に進もうと、私たちの社会が抱えている困難で複雑な課題は何処にでもあり、それらに皆さん自身が果敢にチャレンジして、新しい時代を切り拓くリーダーになってもらいたいと思います。足を踏み出すには勇気がいります。またそれにかかるエネルギーも相当なものになるでしょう。しかしながら私自身の経験から、「行動するかどうかわからないとき、何もしないで様子を見る」ことより、「迷ったときには、リスクを冒してでもまず一歩前に足を



踏み出す」ことのほうが、はるかに自分を成長させてくれたと感じています。失敗することがあっても、まず行動することで得られるものは、実に大きいと感じています。

そのような経験から、私は座右の銘として、「安定は動の中に在り」という言葉を大事にしています。「安定は動の中に在り」、これから旅立つ皆さんの参考になれば幸いです。

最後に、名古屋大学の未来についてお話ししたいと思います。名古屋大学の源流は1871年（明治4年）に創設された仮医学校・仮病院にさかのぼります。2021年には創基150周年を迎えます。また、1939年に我が国で最後の帝国大学となって総合大学の歴史が始まり、これを名古屋大学の開学の年として、2019年には創立80周年を迎えます。さらに、1960年には名古屋大学のシンボルである豊田講堂が当時のトヨタ自動車工業、現在のトヨタ自動車のご寄附により建てられてから、2020年で60周年を迎えます。すなわち、2019年から2021年にかけての3年間は名古屋大学にとって、重要な節目の時期になります。私はこの記念すべき時期に、名古屋大学を一層大きく飛躍させ、世界屈指の大学にしたいと願っています。

名古屋大学は、現在10年後のあるべき姿を全学あげて議論をしています。その中で、特に博士人材の育成にもっともっと力を入れていきたいと思っています。これからの高度知識基盤社会においては、博士人材の活躍こそがわが国の持続的発展を支える原動力であると考えています。そのために、名古屋大学は将来に向けて博士人材のキャリアパスの構築や経済的支援など、大学を挙げて一層、推進したいと思っています。名古屋大学が、地域社会にとっても、在学生や卒業生にとっても、そしてまた我々教職員にとっても、人々の幸せと社会の持続的な発展に貢献する、誇りある大学であるようにしたいと強く願っています。

名古屋大学の一員であるという誇りを胸に、皆さんが大いに活躍することを心から祈念して、私からの祝辞といたします。本日は誠にありがとうございます。

平成28年度学部卒業式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

名古屋大学を卒業される皆さん、本日はご卒業、誠にありがとうございます。本日ここに、学部学生2,172名と、大学院の修士及び博士課程1,887名、合わせて4,059名の皆さんが、名古屋大学を卒業します。皆さんはこの名古屋大学で、指導者の先生、友人、先輩、後輩など、多くの人と知り合い、切磋琢磨して本日を迎えられました。また、長い間皆さんを暖かく支えてくださった、ご両親やご家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げたいと思います。

卒業生の皆さんはいま、どのような気持ちで、この式に臨んでいるでしょうか。名古屋大学のキャンパスで過ごした日々を思い起こしてください。楽しい思い出とともに、苦労したこと、困難にぶつかったことなど、苦い思い出も数多くあったことと思います。それらを乗り越え、本日の卒業式を迎えられた皆さんは、入学した時と比べて、はるかにたくましく、また人間的にも大きくなったことを実感していると思います。そのような皆さんに、私は大いに敬意を表したいと思います。

卒業式にあたり、総長として皆さんに饒（はなむけ）の言葉をおくりたいと思います。メッセージは極めてシンプルです。私の想いは、皆さんに「勇気ある知識人」として、これから大いに活躍していただきたい、ということです。名古屋大学の憲法ともいえる学術憲章は、今から17年前の平成12年、即ち西暦2000年に定められました。その中で、名古屋大学の教育の目標を、「勇気ある知識人」を育てること、としています。勇気ある知識人とは何か、あらためて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

20世紀の終わり、私たちは新しい世紀を迎えるにあたって、多くの期待を抱きました。すなわち、科学技術の飛躍的な進歩により、人類社会はより豊かになり、多くの人々がその果実を享受して幸せに暮らせるのではないかと、という期待です。しかし、21世紀に入ってからの世界は、それまで私たちが想定していた範囲をはるかに超えて、大きく揺れ動いてきました。21世紀初頭の2001年にはアメリカで大規模なテロが発生、その後も世界で大きな出来事が連続して発生しています。ここ1、2年をとっても、世界を揺るがすような大事件が次々と起きていることは皆さんご承知のとおりです。

最近多くの国や地域で台頭してきた保護主義やポピュリズムは、今後世界の在り方を大きく変える可能性があります。この根底には、拡大し続ける貧困や格差の問題があり、また様々な紛争に巻き込まれた多くの難民の問題がありま



す。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の公式発表によると、2014年時点で、世界中で移動を余儀なくされている人、すなわち避難民は約6千万人おり、このうち1年間で新たに強制移動させられた人の数は約1,400万人と報告されています。実にこの5年間で4倍に膨れ上がっています。見方を変えると、毎日4万2,500人の人が家を失い、世界で122人に一人が避難生活をしているという現実があります。

自国の利益を最優先する政策はその国にとってあたり前のことではありますが、一方でグローバル化した現代にあっては、世界的な調和がなされなければ、社会のゆがみは増大し、世界の不安定さはどんどん増していくでしょう。ひいてはそれが自国に跳ね返り、結局は人類全体にとって大きな不利益になることは十分想像がつきます。格差の拡大や難民の増加は、保護主義やポピュリズムの台頭に大きな力を与えているといえるでしょう。ポピュリズムは、論理的な思考よりも、情緒や感情により行動に走る傾向が強く、それが政治の世界でより大きな力をもってきているのが最近の動きであると思っています。

私たちは知識人として、科学的な論理性と高い志に裏打ちされた高度の知識や技術で、世界の人たちが自由に交流し、ともに発展していける社会を作るよう、努力する義務があると思っています。

21世紀の世界はこのように、将来の予測が大変難しい、複雑で変化の激しい時代です。そのような時代にあって、「勇気ある知識人」とはなにか、私の考えを述べたいと思います。

第一は高い志を持って主体的に行動する人です。人はなぜ人たり得るのか、難しい問題です。しかし、人はどのような時に生きがいを感じるのか、と問うた時、私自身は、「人の幸せに貢献できた時、あるいは社会のために貢献できた時」、というのが答えではないかと思っています。

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生し、

未曾有の被害をもたらしました。この時に名古屋大学附属病院の病院長をつとめていた私は、職員と一緒に支援助にあたりましたが、その時の経験は、私の人生の中で極めて大きなインパクトがありました。名古屋大学だけではなく、日本中の人たちが被災地の支援や復興のために、心を一つにして働きました。被災された方々のために何かをせずにはおれない、そのような思いが日本中を突き動かしたと思います。人のために何かをしたい、社会のために貢献したい、という思いを持ち、そのような思いが実感できた時の喜びや感動は、何にもまして大きいものであったと思います。現代における「勇気ある知識人」は、人の幸せや社会の発展のために貢献しようとする高い志と、主体的にかかわる意識をもつこと、これがまず大切であると思います。

第二は、多様性、即ちダイバーシティーへの理解、許容、そして共創、ということです。これまでも述べてきたように、私たちの社会はグローバル化し、国や人種、文化や習慣、宗教や考え方など、異なる属性を持った多様な人々が交流を深めながら、今この瞬間も新しい歴史を作っています。これまで名古屋大学はキャンパスの国際化を進めて来ましたが、また女性の活躍促進も積極的に推し進めてきました。留学生の数は毎年増えており、世界100か国から留学生を受け入れています。正規の留学生だけでも全学生の10%を超えています。また名古屋大学から海外へ出ていく学生は急速に増えており、短期長期合わせると、昨年度（2015年度）は1,000名を超えています。これは2008年度が146名であったのに比べれば、7倍になっています。ややもすると、内向きだといわれがちな名大生は、この10年で大きく変わりました。全体として、名古屋大学は多様性に富んだ活発なキャンパスに変貌したといえるでしょう。

数が変わっただけではなく、このようなキャンパスでは、多様性をじかに触れることのできるチャンスが飛躍的に増えます。単なる知識の世界から、自分の目で見、体で感じて得た生の情報は、皆さんのこれからの人生に大きな財産となると思います。

「勇気ある知識人」の三つめの要素は、「前に一歩足を踏み出す勇気を持つ」ことです。これから皆さんがどのような進路に進もうと、私たちの社会が抱えている困難で複雑な課題は何処にでもあり、それらに皆さん自身が果敢にチャレンジして、新しい時代を切り拓くリーダーになってもらいたいと思います。足を踏み出すには勇気がいります。またそれにかかるエネルギーも相当なものになるでしょう。しかしながら私自身の経験から、「行動するかどうか迷ったとき、何もしないで様子を見る」ことより、「迷ったときには、リスクを冒してでもまず一歩前に足を踏み出す」ことのほうが、はるかに自分を成長させるチャ

ンスを与えてくれたと感じています。行動して、仮に失敗することがあっても、そこから得られるものは実に大きかったと感じています。

そのような経験から、私は座右の銘として、「安定は動の中に在り」という言葉を大事にしています。「安定は動の中に在り」、これから旅立つ皆さんの参考になれば幸いです。

最後に、名古屋大学の未来についてお話ししたいと思います。名古屋大学の源流は1871年（明治4年）に創設された仮医学校・仮病院にさかのぼります。2021年には創基150周年を迎えます。また、1939年に我が国で最後の帝国大学となって総合大学の歴史が始まり、これを名古屋大学の開学の年として、2019年には創立80周年を迎えます。さらに、1960年には名古屋大学のシンボルである豊田講堂が当時のトヨタ自動車工業、現在のトヨタ自動車のご寄附により建てられてから、2020年で60周年を迎えます。すなわち、2019年から2021年にかけての3年間は名古屋大学にとって、重要な節目の時期になります。私はこの記念すべき時期に、名古屋大学を一層大きく飛躍させ、世界屈指の大学にしたいと願っています。

その源泉は人であり、また名古屋大学の評価は、どのような人材を輩出したか、またそれらの人々によりどのような重要な社会貢献がなされたか、にかかっていると思います。その意味で、本日卒業される皆さんは、名古屋大学の活動の重要な成果として貴重な人材であり、皆さんの活躍が名古屋大学の評判を大きく左右します。卒業後はひとつ、大いに母校愛に燃えて、素晴らしい仕事をしていただきたいと願っています。またそのことが社会に進歩をもたらし、人々の幸せにつながっていくことを確信しています。

名古屋大学は、現在10年後のあるべき姿を全学あげて議論をしています。名古屋大学が、地域社会にとっても、在学生や卒業生にとっても、そしてまた我々教職員にとっても、人々の幸せと社会の持続的な発展に貢献する、誇りある大学であるようにしたいと強く願っています。

名古屋大学の一員であるという誇りを胸に、皆さんが大いに活躍することを心から祈念して、私からの祝辞といたします。本日は誠にありがとうございます。

来賓祝辞（大学院修了式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような厳粛なる修了式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

まずもって、本日大学院を修了された皆様お一人おひとりに、心よりお祝いを申し上げます。

別会場でこの式典をご覧になっておられますご家族、ご関係者の方々も、さぞかし、お喜びのことと存じます。

さきほど、松尾総長より学位記を受け取られた代表の皆様、それぞれが、晴れやかな顔をしておられました。大学でしっかりと勉学に励まれていたことがよく分かり、大変うれしく思っている次第でございます。これからの長い人生に、名古屋大学での経験や成果を活かされ、素晴らしいものにしていただきたいと思います。

皆様には、将来、新しい国づくりを担うリーダーとしての役割が期待されております。是非、世界が、そして日本が直面する現実をしっかりと直視し、今後目指すべき理想

の姿に思いを馳せ、決して内向きにならず、大きな夢と高い志を持って、それぞれの道を切り拓いていただきたいと思います。

さて、皆様ご承知のとおり、名古屋大学は、野依良治先生、小林 誠先生、益川敏英先生、下村 脩先生、赤崎勇先生、天野 浩先生と、6名ものノーベル賞受賞者を輩出しております。私ども卒業生はもとより、本日、ご卒業される皆様も、名古屋大学を母校として大いに誇りに感じておられることと思います。

現在、日本は産業・社会・企業だけでなく大学もグローバル競争に直面しており、名古屋大学は松尾総長のリーダーシップの下、「NU MIRAI 2020」というキーワードで、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究を推進しております。

また、昨年9月には国連のUN Womenという組織が、男女平等に取り組む世界の10大学を選出し、日本からは名古屋大学のみが選ばれ、ニューヨークの国連本部での記者会見に松尾総長も招かれました。これは名古屋大学の名声を高めた出来事として、大変嬉しく思っております。





私は、今後ますます名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。そのためには、名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握していただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し14年がたちました。これまで、関東支部、関西支部および遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、マレーシアの15の海外支部を作って参りました。私もフィリピン支部の設立総会に参加させていただきました。昨年は、海外の卒業生の中から大臣を輩出するという喜ばしい出来事もありました。改めて卒業生の皆様のご活躍ぶりを頼もしくも、嬉しく思いました。

さて、全学同窓会では、名古屋大学を支援するため、名古屋大学基金をはじめ、同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております。是非ともこのカードに入会していただき、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思っております。

また、いわゆる七大学、名古屋大学、東京大学、京都大学のほか4大学の同窓会として、学士会というものがございます。学士会は現在、会員5万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、是非、皆様に学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからもますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

最後に、大学院を修了される皆様におかれましては、健康には十分留意され、名古屋大学の卒業生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。



来賓祝辞（学部卒業式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような厳粛なる卒業式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

まずもって、本日卒業された皆様お一人おひとりに、心よりお祝いを申し上げます。

別会場でこの式典をご覧になっておられますご家族、ご関係者の方々も、さぞかし、お喜びのことと存じます。

さきほど、松尾総長より学位記を受け取られた代表の皆様、それぞれが、晴れやかな顔をしておられました。大学でしっかりと勉学に励まれていたことがよく分かり、大変うれしく思っている次第でございます。これからの長い人生に、名古屋大学での経験や成果を活かされ、素晴らしいものにしていただきたいと思います。

皆様には、将来、新しい国づくりを担うリーダーとしての役割が期待されております。是非、世界が、そして日本が直面する現実をしっかりと直視し、今後目指すべき理想



の姿に思いを馳せ、決して内向きにならず、大きな夢と高い志を持って、それぞれの道を切り拓いていただきたいと思います。

さて、皆様ご承知のとおり、名古屋大学は、野依良治先生、小林 誠先生、益川敏英先生、下村 脩先生、赤崎勇先生、天野 浩先生と、6名ものノーベル賞受賞者を輩出しています。私ども卒業生はもとより、本日、ご卒業される皆様も、名古屋大学を母校として大いに誇りに感じておられることと思います。

現在、日本は産業・社会・企業だけでなく大学もグローバル競争に直面しており、名古屋大学は松尾総長のリーダーシップの下、「NU MIRAI 2020」というキーワードで、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究を推進しています。

また、昨年9月には国連のUN Womenという組織が、男女平等に取り組む世界の10大学を選出し、日本からは名古屋大学のみが選ばれ、ニューヨークの国連本部での記者会見に松尾総長も招かれました。これは名古屋大学の名声を高めた出来事として、大変嬉しく思っております。



私は、今後ますます名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。そのためには、名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握していただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し14年がたちました。これまで、関東支部、関西支部および遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、マレーシアの15の海外支部を作って参りました。私もフィリピン支部の設立総会に参加させていただきました。昨年は、海外の卒業生の中から大臣を輩出するという喜ばしい出来事もありました。改めて卒業生の皆様のご活躍ぶりを頼もしくも、嬉しく思いました。



さて、全学同窓会では、名古屋大学を支援するため、名古屋大学基金をはじめ、同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております。是非ともこのカードに入会していただき、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思います。

また、いわゆる七大学、名古屋大学、東京大学、京都大学のほか4大学の同窓会として、学士会というものがございます。学士会は現在、会員5万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、是非、皆様に学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからもますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

最後に、健康には十分留意され、名古屋大学の卒業生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。



TGU Symposium in Nagoya 2017 ～指定国立大学を目指して～ を開催

平成26年度から開始された文部科学省によるスーパーグローバル大学（TGU：Top Global University）創成支援事業の一環として、国際シンポジウム「TGU Symposium in Nagoya 2017」が、2月17日（金）、豊田講堂において開催されました。國枝理事から開会あいさつ及びスーパーグローバル大学創成支援事業の概要説明が行われた後、11名の教員から国際的先端研究力強化、ジョイント・ディグリープログラム、教育改革、留学生受入、留学促進、アジア展開等、これまでの国際化にかかる活動の成果が発表されました。

シンポジウムの後半では、平成29年度に創設される「指定国立大学制度」について会場との意見交換がなされた後、渡辺理事の司会により、国内外の学長経験者等からなる4名の学外委員、松下理事、國枝理事を壇上に迎え、ディスカッションが行われました。学外委員からは、「名古屋大学が持っている高い志と、それを実現するために採用した戦略がいずれも素晴らしく、既に大きな進歩があったと理解しており、正しい道を進んでいるという印象を受けた。



学外委員を含めたディスカッションの様子

拍手を惜しみなく送りたい」「ジョイント・ディグリープログラムは単なる博士学位授与にとどまらず、これを契機に海外大学との共同研究の質と量の拡充も期待でき、さらには論文の質を向上させ、教育研究資金の流入を促し、優秀な人材を惹きつけるといったサイクルを実現するだろう」「多数のノーベル賞受賞者を生み出した普遍的な教育研究に対する心構えや、名古屋大学学術憲章の精神を、大学の構成員全員が共有すること、それが大学を支える原動力になり、ひいては、指定国立大学に選ばれる力になると信じている」等、多数の貴重な提言や激励がなされました。その後、教員・職員のみならず、学生からもこれからの本学の姿について、質問や意見が交わされました。

閉会にあたり、松下理事から「国立大学には大変厳しい逆風が吹いている。そんな中でも我々が進んでいく方向性をしっかりと主張することが重要で、その結果として指定国立大学に選ばれる形が望ましい」と締め括られ、シンポジウムは終了しました。



國枝理事からの事業概要説明に聞き入る聴講者



サイモン・ウォリス環境学研究科教授の講演の様子

短期日本語プログラム（NUSTEP）2017年春季の受入れを実施

短期日本語プログラム（NUSTEP）が、2月9日（木）から23日（木）までの間、実施されました。NUSTEPは平成27年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援構想の下で実施されている2週間のプログラムです。3回目の受入れとなった今回は、インドネシア・オーストラリア・台湾・中国の協定校から30名の学部生を受入れました。



本学の学生との交流会

本プログラムでは、午前に日本語学習、午後に日本の文化・社会について理解を深めるための活動や、本学の教育・研究を体験する活動を行います。具体的には、専門講義の受講や学内研究施設の見学、着付け・書道体験、トヨタの工場見学、キャリア探求ワークショップ、本学学生との交流会など、多岐にわたる活動を行いました。また、週末を利用し、11日（土）は瀬戸・犬山へのフィールドトリップ、18日（土）は希望者のみで市内視察も行いました。

最終日にはプログラムの総まとめとして、様々な活動を通して深まった「日本」についての自身の考えを、資料などを交えながら、日本語での発表を行いました。2週間の滞在の成果とは思えないほどの内容の深さと堪能な日本語に、聴衆として参加した本学の学生や教員は皆驚いている様子でした。

本プログラムを通じて、参加学生は本学の教育や研究に興味を抱いたようで、プログラム終了時には「名古屋大学の大学院に入れるように頑張ります」と目を輝かせて話す学生が多くいたことが印象的でした。

平成28年度「PhD プロフェッショナル登龍門」シンポジウムを開催

博士課程教育リーディングプログラム「PhD プロフェッショナル登龍門」（PhD 登龍門）の平成28年度シンポジウム「社会に羽ばたく博士人材の育成～博士人材のキャリアパス支援～」が、2月16日（木）、名鉄ニューグランドホテルにおいて開催されました。開会にあたり文部科学省高等教育局大学改革推進室の菊地久美子係長からあいさつが述



パネルディスカッションの様子

べられ、本プログラムへの期待の言葉をいただくとともに、松尾総長から本学を代表してあいさつがありました。

第1部「PhD プロフェッショナル登龍門履修生の出口戦略」では、加納敏行 NEC 中央研究所首席技術主幹、前国連アジア太平洋経済社会委員会事務局次長である村田俊一関西学院大学総合政策学部教授の2名から、それぞれ民間企業、国際機関における経験から、世界で活躍するために必要とされる能力やこれからの社会が求める博士人材像等についての講演が行われ、今後の博士人材の育成について論点が提示されました。その後のパネルディスカッションでは、博士人材の育成方法について、海外の事例を含め活発に議論が展開され、博士人材が国際的・実践的環境で活躍するために必要な能力と今後への期待等について、示唆に富む意見が多数述べられました。

また、第2部「名古屋大学 PhD 登龍門の取り組み」では、これまでの PhD 登龍門の取り組みについて、杉山 直コーディネーターからの説明とともに、PhD 登龍門に所属する各学年の履修生達からプログラムにおいて学んだ内容の発表がありました。学生達の成長ぶりに会場からの質問、意見も多く寄せられ、盛況のうちに幕を閉じました。

平成28年度名古屋COI拠点成果発表会及び公開シンポジウムを開催

平成28年度名古屋COI拠点成果発表会及び公開シンポジウム「未来のクルマ×人×社会を創る」が、2月24日（金）、理学南館坂田・平田ホールにおいて開催されました。本催しは、未来社会創造機構が文部科学省及び国立研究開発法人科学技術振興機構から受託した「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」における名古屋



公開シンポジウムの様子

屋COI拠点の取り組みや成果を広く一般に知らせることを目的に年一回開催されています。

成果発表会では、名古屋COI拠点における研究開発と社会実装に関する取り組みを紹介しました。まず、畔柳 滋プロジェクトリーダーから本拠点の全体概要紹介を、森川高行研究リーダーから研究成果報告をそれぞれ行いました。続いて、二宮芳樹モビリティ部門長より、「人と社会によりそうクルマ」と題し、高齢者個人に合わせた運転支援システム研究を中心に、モビリティに関する最新の研究成果を紹介しました。その後、最前線で活躍する研究者と参加者が直接対話できるポスターセッションを行いました。

公開シンポジウムでは、国内一線級のゲストを学外から招き、本学の若手研究者も加わり、10年後の未来についてのパネルディスカッションを行いました。それぞれが自身の活動を動画や製品を用いて紹介した後、会場からの質問に答える形で、新技術がどう世に出るのか、それによって生活や移動がどう変わるのか等に関する活発な議論が行われました。

当日は定員の250名を超える参加があり、盛会のうちに終了しました。

2016年度学生論文コンテストの表彰式を挙

2016年度学生論文コンテストの表彰式が、2月28日（火）、中央図書館において挙行され、審査によって選ばれた最優秀賞1名と優秀賞3名に賞状と副賞が贈られました。

本年度の応募論文16篇は全体に質が高く、選考は難航しました。

受賞論文はいずれも、問いの明確さと論理構成が評価さ



表彰式における記念撮影

れました。とくに最優秀論文は、論理性、幅広い文献の渉猟と適切な引用、明確な主張とその妥当性に関する反対意見も含めた検討などにおいて、論証型論文として高い評価を受けました。行間にテーマであるニホンオオカミに対する「愛を感じる」と評した審査委員もいました。

優秀論文には、先行研究の課題を自分なりに整理したうえで、その課題に即して自分で調査を設計し実施した実証型論文が3件選ばれました。限界がある中で学部学生が独自に調査を試みた努力のみならず、その分析を通じて議論を深めていたことが評価されました。

最優秀賞

「日本におけるオオカミ (*Canis lupus*) 野生復活の可能性」
農学部2年 鈴木 華実

優秀賞

「SNSといじめ～現代のネットいじめとは～」

法学部1年 石川 武利

「若者言葉から見る若者の特徴」

文学部1年 楠元 莉加

「LGBTs 支援は企業にどのような影響を及ぼすか」

経済学部1年 安藤 静花

天野・小出共同研究ラボを開設

「NIMS・名大 GaN 評価基盤研究ラボラトリー-天野・小出共同研究ラボ-」が、3月1日(水)、本学及び物質・材料研究機構(NIMS)それぞれに設置されました。この日はNIMSからも小出康夫理事が出席し、本学のラボを設置した赤崎記念研究館1階の玄関前において看板上掲式を執り行いました。関係者およそ60名が見守る中、松尾総



看板上掲式の様子(左から財満副総長、総長、天野教授、小出理事、磯谷理事、興戸未来材料・システム研究所長)

長、小出理事がそれぞれあいさつした後に記念撮影を行いました。また、ラボが設置された同館2階においては、内覧会及び看板設置が行われました。

本学とNIMSとは、平成27年10月に包括連携協定をすでに締結しており、研究開発、教育・人材育成など、相互協力が可能なすべての分野における連携を進めていますが、今回のラボの設置も研究開発における連携の具体的な施策の一環となります。本ラボは、次世代半導体 GaN (窒化ガリウム) の研究開発、社会実装を加速する上で重要な GaN 結晶及び GaN パワーデバイスの評価技術に係る研究開発を共同して進めて行くことを目的としています。天野 浩未来材料・システム研究所教授と小出理事は赤崎研究室で共に研究をした縁があり、約30年ぶりに共同で研究を進めることとなりました。二人は本ラボの共同ラボ長となり、NIMSからの研究者も参加します。

赤崎記念研究館での看板上掲式の後、NIC 3階大会議室に場所を移して、ラボ設置に関する記念講演会が開催されました。ラボにおいて推進・実施する研究内容や研究体制などについて、小出理事から詳細な説明がありました。

平成28年度「赤崎賞」表彰式を挙行

平成28年度「赤崎賞」表彰式が、3月2日(木)、本部1号館第2会議室において挙行されました。本賞は、本学の若手研究者に対して、科学の発展と社会に多大な貢献をされてきた赤崎 勇特別教授の偉業を広く伝えるとともに、産学官連携を通じた研究開発の一層の発展を促進することを目的として、平成22年度に設けられた顕彰制度であり、



赤崎特別教授、受賞者を囲んで記念撮影

赤崎特別教授から京都賞受賞記念として本学に寄贈いただいた寄附金により運用されています。

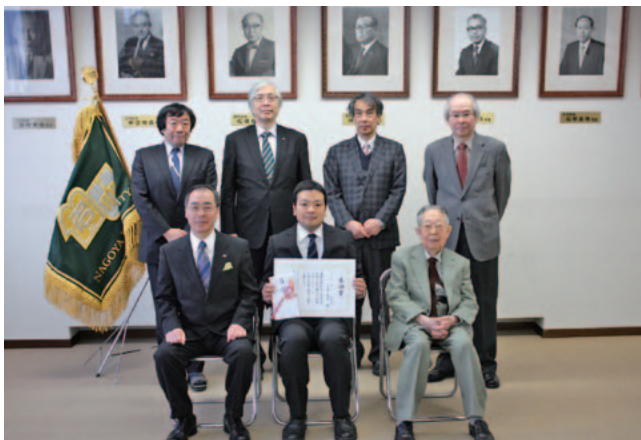
本賞は、本学に在籍する35歳以下の学生及び研究者の中から、学術・科学技術分野で将来的な発展や可能性が期待でき、本学の学術・科学技術水準の高さを内外に知らしめることができる研究を行っている方を対象としています。今年度は6件の応募があり、学術研究・産学官連携推進本部長らを委員とした赤崎特別顕彰審査委員会で厳正な審査を行った結果、廣戸 聡工学研究科助教(研究テーマ:平面機能性分子の構造変換による曲面分子の機能創出)及び佐藤和秀医学部附属病院医員(研究テーマ: Spatially selective depletion of tumor-associated regulatory T cells with near-infrared photoimmunotherapy)が受賞者に選ばれました。

表彰式では、松尾総長のあいさつの後、審査委員会委員長である財満副総長から受賞者の発表と講評があり、次いで、赤崎特別教授から受賞者に正賞の表彰状と副賞の目録が贈呈されました。

受賞者からは、受賞の喜びとともに研究開発の更なる邁進を誓う謝辞がありました。

第5回水田賞授賞式を挙

第5回水田賞授賞式が、3月3日(金)、本部1号館第2会議室において挙行されました。水田賞は、水田 洋名誉教授からのご寄附の意志に基づき、人文・社会科学(思想史)の分野で将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で創設されました。今年度で第5回目の



記念撮影

開催となり、人文・社会科学(思想史)の分野における国内の若手研究者を対象に募集を行い、慎重な審査を行った結果、荒井智行東京福祉大学特任講師を顕彰することに決定しました。

授賞式には、松尾総長、水田名誉教授、國枝理事、市橋理事及び審査委員である安藤隆穂中部大学教授、田中秀夫愛知学院大学教授が出席しました。國枝理事から受賞者の発表があった後、安藤教授から研究テーマについての審査講評がありました。次いで、総長から「今回の受賞を励みに、今後も高い志をもって自らの研究に精進し、我が国の学術研究の発展に貢献していただきたい」とのあいさつが述べられました。

受賞者からは、「水田先生の前で名誉ある賞を頂くことができ、大変嬉しい。今後も研究に精進し、賞に恥じない成果を出したい」との謝辞がありました。

その後、総長応接室において、受賞者及び授賞式出席者との懇談が行われ、研究の動機や今後の研究の発展性について活発な意見交換がなされました。

平成28年度卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成28年度卒業・修了留学生を送る夕べが、3月3日(金)、南部生協において開催されました。この送る夕べは、3月末で本学を卒業・修了する留学生の今後の活躍を祈念するとともに、日頃留学生がお世話になっている各種財団等の関係者やボランティア団体関係者等を招き、それらの方々と関係教職員、留学生の一層の相互理解・交流を深め



渡辺理事から記念品を受け取る留学生代表

ることを目的としています。当日は、来賓、留学生、教職員など約130名の参加がありました。

松尾総長のあいさつで始まり、来賓からは尾関信幸公益財団法人豊秋奨学会顧問から卒業・修了留学生に対するお祝いの言葉が述べられました。続いて、渡辺理事の発声による乾杯の後懇談に移り、留学生が総長や教職員を囲んで、にこやかに歓談したり、記念撮影したりする姿が会場のあちらこちらで見られました。名古屋大学留学生後援会から、卒業・修了留学生に対して記念品の贈呈があり、渡辺理事から各部局の卒業・修了留学生代表に、記念品が手渡されました。続いて、卒業生・修了生を代表して、経済学研究科の楊 成寧さん(中国)と生命農学研究科のワシルワ・ジャクリーンさん(ケニア)が、それぞれ本学での思い出と今後の抱負を述べました。卒業・修了留学生たちの、将来の活躍が期待されます。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ調印式を挙

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）の調印式が、3月3日（金）、総長室において挙行されました。

GRLは、篤志家のご寄附により、東山キャンパスの南側、山手グリーンロード沿いに建設され、床面積は840m²、鉄骨造の2階建てで、最大4万冊を収蔵できる図書スペース、



調印式での記念撮影

アーカイブのほか、閲覧室、展示コーナー、研究スペース、セミナー室、カフェスペース等を備えた研究活動施設です。

ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集、保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことを目的とします。

今回のGRL創設を機に、公益財団法人東海ジェンダー研究所から、ジェンダー関連の貴重書を含む図書・資料及び今後20年間にわたる運営費をご寄附いただくこととなり、尽力された東海ジェンダー研究所の西山恵美代表理事、同研究所顧問でジェンダー関連図書を寄贈くださる水田珠枝名古屋経済大学名誉教授をはじめ、研究所の皆様と、松尾総長、國枝理事、本学関係者にて、図書等寄贈の合意調印式を行いました。調印式終了後には広報プラザに移動し、メディア向けに発表会見を開催しました。

今後は、東海ジェンダー研究所と本学との連携により、ジェンダー研究の拠点として、諸事業を展開していくこととなります。

天野 浩教授が上海において講演会を開催

天野 浩未来材料・システム研究所教授は、渡辺理事、張中国交流センター長とともに、3月10日（金）から12日（日）までの3日間、上海市を訪問し講演しました。

本学は、上海市に中国交流センターを置き、上海交通大学をはじめ同済大学、復旦大学との学生交換や全学同窓会上海支部との連携など、上海市とは積極的な交流を行って

います。

10日（金）の午後、上海日本人学校浦東校において、同校高等部・中等部学生、上海インターナショナル校日本人学生、その家族を対象とした講演会を開催しました。会場には100名を超える参加者が天野教授のノーベル賞受賞秘話に耳を傾けました。

翌11日（土）には、日中国交正常化45周年記念行事として、上海市人民対外友好協会及び上海白玉蘭会の主催により「世界を照らすLED」と題した講演会を上海科学堂国際会議庁にて開催しました。本学では大学院リクルーティングのため、2014年から中国の協定大学学生向けに模擬講義「名大巡講」を実施しており、今回の講演会もその一環として実施されました。会場には、上海交通大学、同済大学、復旦大学等協定校の学生・教職員をはじめ、上海日本商工クラブや上海邦人代表など両国の関係者約250名が参加しました。渡辺理事が本学の紹介をした後、天野教授が講演し、ノーベル物理学賞受賞のエピソードや、青色LED発明の過程、発明がもたらした効果とともに、若い世代へのメッセージなどが話されました。



上海科学堂国際会議庁での講演会の様子

強レーザー場であやつる原子・分子

菱川 明栄 物質科学国際研究センター教授

強レーザー場中の原子・分子

強い光の中で原子や分子が示すちょっと変わったふるまいが関心を集めています。強い光の場はフェムト秒パルスレーザーをレンズなどで集光してつくることができ、図1に示した例だと集光スポットでの光強度は $20 \times 10^{15} \text{ W/cm}^2$ にもなります。これは電場に換算して $4 \times 10^9 \text{ V/cm}$ に相当し、水素原子の1s軌道電子が陽子から感じるクーロン電場とほぼ同じ大きさです。これまでの研究で、こうした強い光の場（＝「強レーザー場」）にさらされた原子や分子は、光が弱い場合の姿からは想像できなかったような特殊な性質を示すことがわかってきました。そこで見出された現象は、アト秒（ $10^{-18} \text{ s} = 100$ 京分の1秒）領域の極めて短い光パルスの発生や、リモートセンシング、粒子加速への応用など、様々な研究分野でこれまでの常識を超えた新しい展開をもたらしています。

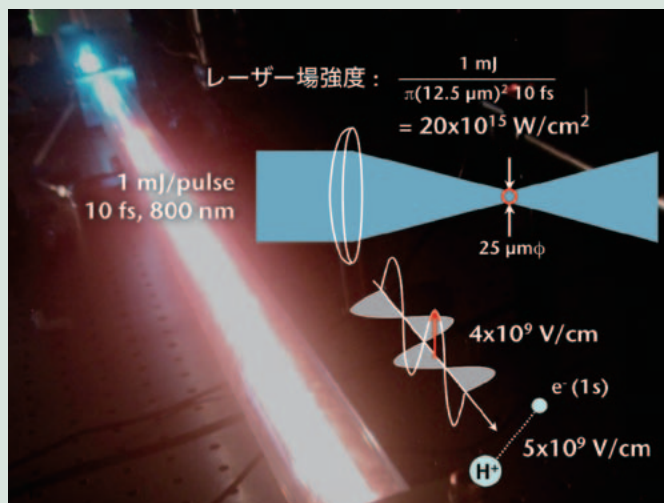


図1 強レーザー場の発生

光の衣をまとった原子

強レーザー場では光と電子の間の相互作用が、電子と原子核の間とほぼ同じになります。もはや光と原子を別のものとして扱うことができないので、こうした状態は「光の衣をまとった状態」（＝「光ドレスト状態」）などと呼ばれます。

ドレスト状態のエネルギー単位はレーザー場の強さに応じて大きく変化します。一般にその変化の様子は複雑ですが、中には単純なルールに従うものがあります。例えばイオン化ポテンシャルは光強度に応じて大きくなることが知られています。このエネルギー増加分はポンデロモーティブ（動重力）エネルギーと呼ばれ、レーザーの強度に比例します。「リユードベリ状態」と呼ばれるイオン化極限に近い（束縛）状態もこのルールに従ってエネルギーが変化します。

私たちはこの性質に着目することで、2個の光子を使ってヘリウム原子の2つの状態間を100%

に近い効率で高速に行き来させることに成功しました（図2）[1]。これは2光子ラビ振動と呼ばれる現象で、量子コンピュータなどの基盤技術として知られています。光強度の変化に敏感なラビ振動を精密に観測するために、励起したヘリウム原子を強レーザー場の中心に用意するなどの工夫をすることで、従来に比べて3桁近い速さで量子状態の高効率操作を実現できました。

この手法は光による物質のエネルギー状態の変化を利用した簡便な手法を用いており、複雑なレーザーパルスを準備する必要がありません。ラビ振動の周期は数十フェムト秒と極めて短く、発光や衝

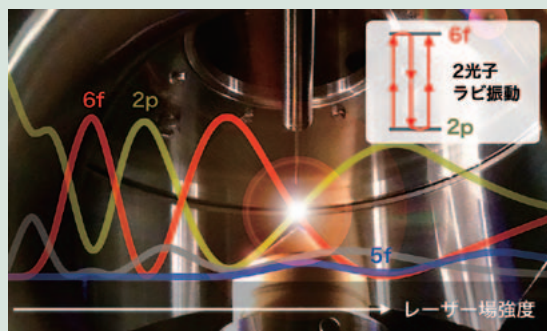


図2 強レーザー場によるフェムト秒2光子ラビ振動 [1]

突などによってラビ振動が妨げられる前に、標的とする物質の状態操作を完了させることが可能となります。今後、光エレクトロニクス、量子光学、量子情報などの基盤技術としての応用が期待されます。

反応コントロール

光ドレスト状態の生成は、分子では化学結合の強さに影響を及ぼします。これは分子のポテンシャルエネルギー曲面の形状が、光によってその形を変えることに由来しています。うまくこれを利用すれば普通では難しい光反応を起こすことも可能となります。

2酸化炭素 (CO_2) 分子は2つのC-O結合をもちます。適当な波長の光を照射することで、このうちどちらかを切ることができます。2つの結合は等価なので、普通は、どちらが切れるかは全くランダムで確率にして同じ50%ずつになります。これに対して私たちはレーザー波形を整形した強レーザー場を用いることで、2つの結合のうち、どちらかを優先的に切断することに成功しました (図3) [2, 3]。2つの経路の差はまだ6%

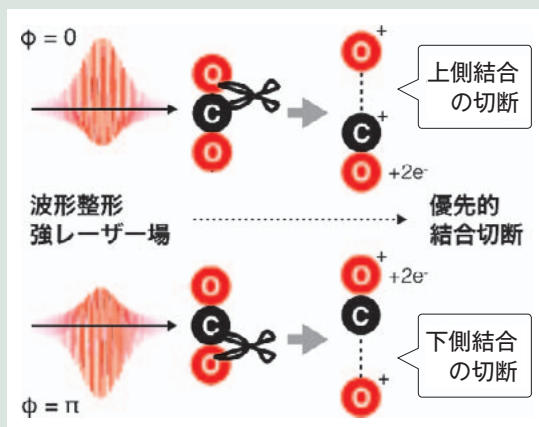


図3 波形成形した強レーザー場による反応コントロール

程度ですが、この結果は強レーザー場が新たな反応経路をひらく反応場として働くことを示唆しています。今後、光の大きな自由度を利用することによって、高効率で高精度な化学反応コントロールの実現につながると考えられます。

ここで紹介したフォトニクス [1] や反応コントロール [2, 3] への応用の他に、超高速反応ダイナミクスの可視化に向けた研究 [4] も行っています。今後、さらに光を使いこなすことで、これまでの常識を超えた新しい世界を拓いていきたいと考えています。

- [1] M. Fushitani *et al.*: Nature Photon. **10**, 102 (2016).
- [2] T. Endo *et al.*: J. Electron Spectrosc. Relat. Phenom. **207**, 50 (2016).
- [3] T. Endo *et al.*: Phys. Chem. Chem. Phys. (2017) DOI:10.1039/C6CP07471E.
- [4] T. Endo *et al.*: Phys. Rev. Lett. **116**, 163002 (2016).

1994年京都大学大学院工学研究科物理工学専攻博士課程修了、博士(工学)。東京大学大学院総合文化研究科助手、同理学系研究科助手、講師、助教授、自然科学研究機構 分子科学研究所准教授を経て、2010年名古屋大学理学研究科教授、2015年より現職。

ひしかわ あきよし



林 幸壺朗
 未来材料・システム研究所助教

がんを見つけて破壊するナノ粒子の開発

進行がんの治療法として最も普及している化学療法では、治療効果を発揮する抗がん剤濃度と副作用が生じる濃度とが近いため、治療効果を高めるために安易に抗がん剤の投与量を増やすことができません。また、化学療法では、がん細胞が抗がん剤に対する耐性を次第に獲得することも問題としてあります。

近年、ナノ粒子を用いてより多くの抗がん剤を腫瘍に選択的に輸送することで、治療効果の向上と副作用の軽減を狙う試みがなされています。これは、ナノ粒子が腫瘍に集積しやすい特徴を持つためです。しかし、単に抗がん剤を腫瘍に輸送するだけでは、薬剤耐性を獲得したがん細胞を殺傷することはできません。

上記の問題を解決するために、当研究室では、がん細胞に物理的ダメージを与えながら、抗がん剤を作用させることを可能にする多機能ナノ粒子を開発しており、抗がん剤に対する耐性を獲得したがん細胞でも殺傷できる治療法の開発に取り組んでいます。さらに、上記の多機能ナノ粒子にがん細胞をイメージングにより可視化する機能を付与することにより、がん組織にだけ刺激を与え破壊するといった画像ガイド下での治療の開発にも取り組んでいます。

これまでに、がん組織を光らせたりMRIでコントラストをつけることで、がんを可視化するナノ粒子を開発することができています。これらのナノ粒子は光や交流磁場に応答して発熱したり活性酸素を発生します。さらに、これらのナノ粒子にあらかじめ抗がん剤を封入しておけば、光や交

流磁場に応答して抗がん剤を放出します。また、これらのナノ粒子は、光や交流磁場のような外部刺激だけでなく、がん細胞内の還元環境に応答して抗がん剤を放出する機能も持ちます。これらの多様な機能を併せ持つナノ粒子を用いることで、イメージングによりがん組織を可視化でき、可視化されたがん組織に光や交流磁場といった外部刺激を加えることで、熱や活性酸素により物理的にがん細胞を破壊し、同時に抗がん剤を作用させることが可能になります。この結果、がん組織を完全に破壊し、再発を防ぐことができています。

現在、上記のナノ粒子を用いて、がんだけでなく心不全や肝硬変の治療に取り組んでいます。

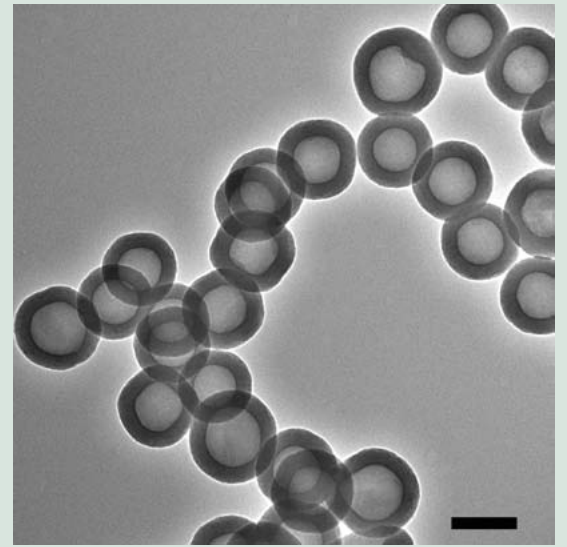


図1. がんを光らせ破壊する多機能中空ナノ粒子のTEM像。
 スケールバー：200 nm。



図2. MRIガイド下での温熱化学療法を可能にする多機能ナノ粒子を静脈内投与してから24時間後に交流磁場を20分間印加したマウス(右)。無処置のマウス(左)。

平成28年度名古屋大学総長顕彰

7名2団体を表彰



平成28年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月27日(月)、豊田講堂第1会議室において行われ、7名の学生と2団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を实践している学生を称えるため、平成15年度に創設されたものです。顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果が伴う取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)及び「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に6件の学部推薦があり、また、「正課外活動への取り組み」部門には自薦・他薦を合わせて9件の応募がありました。

これら合計15件の推薦・応募について、理事及び部局長等で構成された総長顕彰委員会における審査の結果、「学修への取り組み」部門で6名、「正

課外活動への取り組み」部門で1名・2団体が受賞しました。

授与式終了後に行われた総長と受賞学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中、総長から学生に対する将来への激励があり、また、関係教職員と受賞学生による活発な意見交換が行われました。

全体の講評

今年度で14回目を迎える総長顕彰制度への推薦・応募のあった学生達の取り組みは、意欲や姿勢、各活動への情熱や熱意が感じられ、とても素晴らしいものばかりでした。惜しくも受賞を逃した学生も甲乙付けがたい内容であり、今後の活躍が楽しみです。

受賞した学生・団体においては、名古屋大学の目指す「勇気ある知識人」としての更なる研鑽を積み、今後の学生生活、社会生活において、後に続く本学の他の学生の目標となりうる人材として、さらなる成長を期待します。

「学修への取り組み」部門

氏名	学部学科・学年	受賞理由
鈴木 草宮 勲	教育学部人間発達科学科 4年	高校生の頃から教育学に関心を持ち、入学後は広く教育学を学びながら、近年注目を浴びてきている中等教育における部活動問題を取り上げ、積極的かつ意欲的に研究に取り組んできた。また、学修に取り組む傍ら、名古屋大学女子ラクロス部において活躍し、組織づくりにおいて主導的な役割を果たすなど、何事にも熱心に取り組む姿勢は、他の学生の模範となるものである。大学院進学後も大いに活躍を期待する。
加藤 希歩	経済学部経済学科 4年	成績優秀により、学部4年間と大学院1年間の計5年間で大学院博士課程前期課程まで修了できる「学部・修士5年一貫教育プログラム」の履修生に選ばれ、すでに4年次より大学院レベルの講義も受講し始めている。一方で、資格取得のための受験勉強も同時に進め、実践的・実務的な知識の取得にも務めており、高い学修意欲を持っている。大学院進学後も積極的な活躍をすることを期待する。
戸谷 充寿	理学部化学科 4年	4年生ながら、有機ナノチューブ合成研究における成果は高い評価を得ており、国際学会で発表して意義あるレベルに達している。また、研究活動のみではなく、部活動、教育活動といった様々な取り組みに対して非常に意欲的な姿勢がみられ、周りからの信頼も厚く、他の学生の模範となる人物である。大学院進学後もさらに研究を進展させ、将来は優れた研究者・教育者として活躍することを期待する。
野口 陽一朗	医学部医学科 6年	学修に非常に熱心に取り組む、6年次の実習中に考察した症例について、学会で発表した。また、基礎医学セミナーでは優秀賞を受賞した。同級生のみではなく、他大学の学生や、他学年の学生が参加する勉強会の自主的な開催をはじめとして、積極的かつ意欲的な後輩指導など、自身の学修のみならず、他の学生に対してもよい影響を与えている。卒業後は医師として医療の充実に尽力することを期待する。
崔 敏	工学部物理工学科 4年	いずれの授業科目に対しても意欲的な態度で臨み、ほとんどがS評価というきわめて優秀な成績を修めた。また、日英中韓の四カ国語を自由に使いこなす優れた語学力をもち、積極的に英語で発言するなど、日本人学生の語学学習意欲に対しても大きな影響を与えている。大学院進学後もさらに研究を進展させ、基礎学力に支えられた研究力、多様な国際活動を積極的に先導する行動力を兼ね備えた研究者・技術者へと成長することを期待する。
赤塚 秀次	農学部応用生命科学科 4年	講義への積極的な参加はもちろんのこと、2年次より友人たちと自主的に勉強会を開催するなど、未学習の分野の学習も主体的に進め、優秀な成績を修めたこと、また、専門的な内容を英語で議論する訓練を重ね、語学力の向上に取り組むなど、積極的にたゆまず努力し続けるという姿勢は、シンプルながら他の学生の模範となるものである。大学院進学後も活躍することを期待する。

「正課外活動への取り組み」部門

氏名・団体名	代表者	分野	受賞理由
名古屋大学 学生法律相談所	伊藤 通宗 (法学部法律・ 政治学科 3年)	社会への貢献活動 本学への貢献活動	名古屋大学学生法律相談所は、「法的知識の地域への還元」を活動理念に掲げ、約50年前に結成された法学部公認サークルであり、弁護士として活躍しているOB・OGの協力を得ながら、主として学外の方を対象とした無料法律相談を行っている。累計相談件数は4,000件以上に上り、広く、また気軽に利用できる法律相談として、大いに社会に貢献しており、今後の活躍にも期待が持てる。
混声合唱団 名古屋大学 コール・グランツェ	わたなべ ひろ 貴 (理学部 物理学科 3年)	正課外活動(部活動) 本学への貢献活動	来年創団40周年を迎え、本学学生100名を超える大人数の合唱団へと成長し、平成28年度の全日本合唱コンクールでは金賞2位、及びカワイ奨励賞などの数々の賞を受賞し、「混声合唱団名古屋大学コール・グランツェ」の名前とともに、名古屋大学の名誉を高めた。近年、新しいジャンルの音楽活動にも積極的に挑戦しており、今後の活躍が大いに期待される。
木下 悟 (農学部 応用生命科学科 4年)		本学への貢献活動 国際交流	日本人学生と留学生との交流を図るイベントの企画・運営による本学の国際交流の促進と、自分自身の海外経験を他の学生と共有し、留学や国際交流に興味を持つ学生の支援、及び継続的な留学生支援により、本学の国際化に多大な貢献をしたことは、高く評価できる。大学院進学後も、継続して活動を続け、将来は自身の研究で得た知識も活かし、広く社会に貢献することを期待する。

平成28年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

「学修への取り組み」部門

体験から学術的研究へ

鈴木 草宮 教育学部人間発達科学科4年



教育経営学領域のゼミでの調査（上段）、部活動（下段左）、卒業論文執筆（下段右）における様子

私は4年間の学生生活を通して、教育学を学ぶと共に、女子ラクロス部に所属し、日々練習やミーティングを重ねてきました。そして、自主的に組織・運営する部活動に参加する中で、次第に体験的次元の「部活動」だけでなく、研究的次元の「部活動」にも関心を持つようになりました。しかし、部活動を対象とした学術的研究は、教育学領域において蓄積されておらず、今後の更なる研究が求められています。

そこで、私は教職員組合の例会などに参加し、実際に部活動の実態調査を行い、また、北海道稚内市の中学校を事例に、部活動の本質的教育活動としてのあり方をゼミで検討しました。更に、卒業論文で、現在多様な形態で表出している部活動をめぐる問題を整理し、その問題の所在を明らかにしました。

今後は、部活動研究の学問的アプローチにこだわり、部活動研究の発展を目指したいと思います。そして、部活動をめぐる問題の解消につながることに尽力したいです。

すずき さえこ 1994年生まれ 静岡県出身

「学修への取り組み」部門

挑戦から学んだこと

加藤 希歩 経済学部経済学科4年



勉強に使用したPCや参考書

私は、大学4年間で2つのことに挑戦しました。

1つ目は、「学部・修士5年一貫教育プログラム」への挑戦です。学部4年間と大学院1年間の合計5年間で大学院前期課程まで修了できるプログラムへの参加から自分の意見をしっかり持つことの大切さを学びました。ディスカッションをする場面が多い大学院の授業では「ただ聞く」というよりは「参加する」という面が強く、自分の意見が求められます。また、大学院には社会人やより多くの留学生など様々な学生がいるので、その人たちと交流することで自分の考えや視野が広がったと思います。

2つ目は、大学での勉強がきっかけとなった公認会計士試験への挑戦です。試験科目の6科目についての知識と時間の有効活用の仕方について習得することができました。

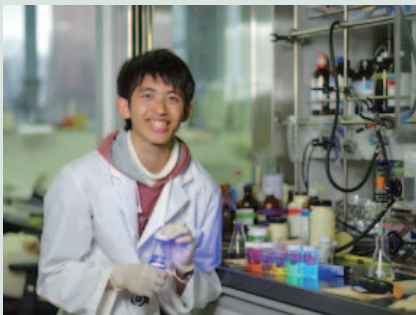
4月からは、大学院に進学します。そして、公認会計士の資格を取得して監査法人で働くという自分の目標に向かって、さらに視野を広げ、精進していきたいです。

かとう きほ 1994年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

教育できる有機化学者へ

戸谷 充寿 理学部化学科4年



研究室での有機ナノチューブ合成の様子

私は、「教育＝自育」の信念を基に大学4年間の学生生活を過ごしてきました。大学生活で共に切磋琢磨した仲間と勉強会などを開催して教えあえたことは、自身の学力向上と人間性の成長において、大きな影響を与えてくれました。教育は、社会生活の中で不可欠なものであり、教育を通して今後も成長していきたいと考えております。

現在私は有機化学研究室で、新規合成手法「Helix-to-Tube法」による有機ナノチューブ開発の研究を行っています。この合成法は世界中の研究者の注目を集めており、有機ナノチューブ合成に新風を吹き込む革新的手法です。私は、機械的強度や熱的安定性、電気的・光学的特性を持った多種多様な一連の有機ナノチューブを設計・合成し幅広い分野で活躍できる分子をつくることを目指しています。

今後、大学院へ進学し後輩指導などを通して教育できる化学者を目指すとともに、自分の名前をつけられるほど魅力ある分子を世界へ発信したいと考えています。

とや みちひさ 1995年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

基礎医学と臨床医学の両立を目指して

野口 陽一朗 医学部医学科6年



全国合同リトリートでの代表挨拶

私は、一年次より医学部の神経遺伝情報学教室に所属し、基礎医学研究を行いました。その研究成果により、三年次の基礎医学セミナーで、優秀賞を受賞しました。さらに、この内容を、生理学研究所・名古屋大学の合同シンポジウムなどで発表しました。実験以外でも、医学部の研究者育成プログラムである基礎医学研究者育成プログラムで平成26年度代表を務め、他大学との合同研究発表会である全国合同リトリートを中心となって開催しました。

一方、臨床分野においては、6年次の実習で考察した症例を日本呼吸器学会東海地方学会にて発表しました。また、臨床実習に得た知識は、定期的に勉強会を開き、同級生は勿論、上級生、下級生とも共有してきました。

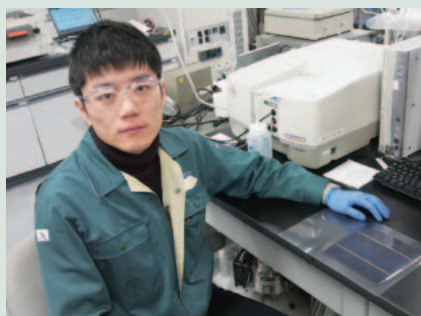
私は、今後、研修医として臨床技能を磨き、呼吸器内科医になるつもりです。そして、学生時代の研究知識・経験を生かして、未知の病態の解明や新しい治療法の開発に携わる所存です。

のぐち よういちろう 1993年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

太陽電池がささえる未来を夢見て

崔 敏 工学部物理工学科4年



研究室にて太陽電池を手に

6年前の春、語学研修で大阪を訪れていた私は、原発事故のことを知り、生まれて初めてエネルギー問題を真剣に考えました。結果、太陽光発電こそ未来の社会をささえるエネルギー源であると確信し、太陽電池の研究を目指して名古屋大学の門戸を叩きました。学部3年生までは、日々新しい知識に触れ、自らの知識欲を満たしました。先生に疑問をぶつけ、学友と議論を交わして学問に対する理解を深め、研究のための土台を築きました。

この1年間は、太陽電池の高効率化技術の一つであるキャリア選択輸送層の材料としてヨウ化銅に注目し、独自の方法で良質なヨウ化銅薄膜の作製に成功しました。これを太陽電池に導入し、太陽電池特有の電気的特性を引き出すことができました。

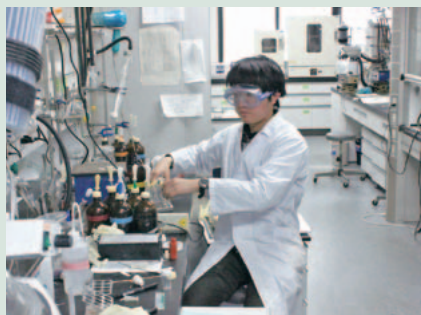
4月から大学院に進み、ヨウ化銅を導入した太陽電池の研究を更に深めていきたいと思っています。修士・博士を経て、ゆくゆくは太陽電池がささえる未来社会の実現に尽力したいと考えています。

さい びん 1987年生まれ 中国吉林省延辺出身

「学修への取り組み」部門

自ら考え、創造する研究者へ

赤塚 秀次 農学部応用生命工学科4年



実験室での研究風景

大学4年間で休暇中においても勉学に励み、講義で扱っていない内容でも積極的に学習する、という習慣をつけることにより、周りに頼ることなく自分で考える力が身についたと感じました。この力は学士4年次での卒業研究で大いに役立ちました。卒業研究では新規有機反応の開発研究に携わっていましたが、その研究の中で、自分が考えたことを実際に実験してみて、自分が予想していた通りの結果となるか検証し、次の研究テーマを創出する良い機会となりました。修士課程1年において、自分の研究結果を国際学会の場で発表する機会をいただいたので、それまでにこれまでの研究をまとめあげ、かつ研究成果を論文として残したいと考えています。博士課程進学後は天然物の全合成研究に取り組み、自分が考えた合成ルートで全合成を達成し、天然物に限らずどんな有機化合物でも合成できるだけの実力を得て、社会のために貢献できるような人材になりたいと考えています。

あかつか しゅうじ 1994年生まれ 三重県出身

「正課外活動への取り組み」部門／社会への貢献活動・本学への貢献活動

法律相談を通じた社会貢献

名古屋大学学生法律相談所

伊藤 通崇 法学部法律・政治学科3年



上は出張相談時の、下はOBOGの弁護士事務所にて、
事案の再検討を行っている様子

名古屋大学学生法律相談所（法相）は、1966年から無料法律相談を行っている法学部公認サークルです。毎週土曜日の13時～15時に、プレハブ棟201号室にて通常相談を行っているほか、年に2回、名古屋市近郊にて出張相談を行っています。

法相の活動目的は主に2つあります。1つは「法的知識の地域への還元」です。学生が主体のアマチュア相談所ですが、OBOGの弁護士の協力を得て、日頃の学びを生かした法学部独自の社会貢献を実践しています。もう1つは、「法律学の素養の形成」です。実社会の問題に対して、当事者の事情を無視した法律論の直接適用は妥当ではありません。問題発生の過程の分析と回答の作成を通して、「生きた法律」を学んでいます。

お陰様で、地域の方々の信頼を得て、創設以来50年間に4000件以上の相談を受けました。今後は東海地方以外での出張相談等を実施し、ボランティア活動の場を広げて行きたいと思っています。

いとう みちたか 1994年生まれ 愛知県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（部活動）・本学への貢献活動

全国大会を目指して

混声合唱団名古屋大学

コール・グランツェ

渡邊 大貴 理学部物理学科3年



全国大会前の円陣（上段）、合唱前の風景（下段）

こんにちは、私達は混声合唱団名古屋大学コール・グランツェです。私達は100人を超える大人数の合唱団として日々精力的に活動しています。

私達は以前にも一度全国大会へ出場した経験がありました。しかしそれ以来成績が振るわず、行き詰っている状態だったのです。そこで私達は全国大会出場を目標に掲げ、日々努力を続けて来ました。前回全国大会に出場された先輩方は殆ど卒団されており、まさに闇の中を手探りで進んで行くようでした。進むべき道を見失ったこともありましたが、仲間同士で衝突した事もありました。それでも諦めずそれらを乗り越えて、昨年度に行われました全日本合唱コンクール全国大会において金賞2位並びに鳥取市教育委員会教育長賞、およびカワイ奨励賞を受賞することができました。創団39年目にして初の快挙でした。

今後はさらなる合唱技術向上に向け邁進して参りたいと思っております。

わたなべ ひろき 1995年生まれ 岐阜県出身

「正課外活動への取り組み」部門／本学への貢献活動・国際交流

多方面からの大学の国際化を目指して

木下 悟 農学部応用生命科学科4年



国際棟で行われている国際交流企画コーヒアワーの活動風景

私は今まで、留学生への支援活動、学内の国際交流企画、本学日本人学生の留学支援といった面から大学の国際化に努めて来ました。

留学生に対しては、一年次から継続して新規留学生の入寮サポートやバザーの開催といった支援活動と国際交流企画を行ってきました。この経験を通して、文化面、言語面で疎外感を感じやすい留学生たちの悩みには、日本人学生の支援次第で解決できるものも多いことを実感したため、活動を続けています。

加えて、スウェーデンでの交換留学を経験した一人の学生の立場から留学や海外研修を迷っている日本人学生に対し背中を押せる存在になれるよう、渡航前や渡航中の学生の相談に乗り、自身の留学や研修体験も様々な媒体を通して報告してきました。

大学の国際化は大学教職員の方々の力だけではなく学生の力も必要であると考えられるため、少しでも国際化に携わる学生が増えるように今後もこれらの活動に尽力していきたいです。

きのした さとる 1993年生まれ 愛知県出身

最新式手術支援ロボット “ダ・ヴィンチ Xi” 寄贈目録受領式及び感謝状贈呈式を挙

●医学部附属病院



目録贈呈の様子（左、石黒病院長 右、小林社長）

医学部附属病院は、3月6日(月)、鶴舞キャンパスの中央診療棟3階講堂において、最新式手術支援ロボット“ダ・ヴィンチ Xi” 寄贈目録受領式及び感謝状贈呈式を挙りました。今回の寄贈は、株式会社パロマ及び同社の小林弘明代表取締役社長より、医学・医療進歩のために活用願いたいとのご意向により実現したものです。“ダ・ヴィンチ Xi”とともに寄贈いただいた、可動式手術台“TruSystemR 7000dV”は、ダ・ヴィンチシステムと連動する画期的な手術台であり、導入している施設は現時点で同院を含め3施設のみです。

寄贈目録受領式及び感謝状贈呈式は、二部構成で行われ、まず第一部では、小林社長から石黒医学部附属病院長へ目録の贈呈があり、次いで、石黒病院長から小林社長へ感謝状の贈呈がありました。引き続き、小林社長のあいさつ及び石黒病院長の謝辞があり、小林社長は、医療や技術の進歩により一人でも多くの方が救われることを願うという思いを、ご自身の体験も踏まえて述べ、石黒病院長は、今回の寄贈に対する感謝とともに、医療人としてさらに精進する旨を述べました。

その後、寄贈いただいた“ダ・ヴィンチ Xi”の前で、関係者による記念撮影が行われ、第二部の記者会見に移りました。

記者会見では、丹羽利行株式会社パロマ取締役執行役員から同社の社会貢献事業等に関する取り組みが述べられ、次いで、石黒病院長から同院の特長や目指すべき方向性などについて、最後に、後藤百万同院泌尿器科教授から、同院におけるロボット支援手術の現状と展望について、それぞれ説明がありました。

続いて、記者による活発な質疑応答が行われた後、吉野 能同院泌尿器科講師による、“ダ・ヴィンチ Xi”のデモンストレーションが行われました。“ダ・ヴィンチ Xi”と連動する可動式手術台“TruSystemR 7000dV”の動きに、参加者からは驚きの声があがりました。

同院では、泌尿器科において急増する前立腺癌や腎癌に対するロボット支援手術をはじめ、消化器外科、胸部外科、婦人科、耳鼻科など幅広い診療科における先進的ロボット支援手術に、寄贈いただいたダ・ヴィンチ Xiを活用していく予定です。



記念撮影の様子



デモンストレーションする吉野講師

公開シンポジウム「文学研究科のこれまでと、これからの人文学研究科」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月4日(土)、文学研究科講義室において、公開シンポジウム「文学研究科のこれまでと、これからの人文学研究科」を開催しました。

本学では、平成29年4月に人文系部局である文学研究科・国際言語文化研究科・国際開発研究科国際コミュニケーション専攻を再編し、人文学研究科を設置します。そこ



討論の様子

で、今回は、新研究科の理念の一つである分野横断的な教育研究をテーマとして、文学研究科の歩みを振り返ることにより、新研究科の将来を展望するものとなりました。まず、元文学部長である山田弘明名誉教授が「大学院重点化の基本構想」と題して、平成12年の大学院重点化の構想と、これと前後して設置された、分野横断的教育研究を担う比較人文学講座の理念について、次いで、元文学部長である若尾祐司名誉教授が「人文学の将来性と分野連携を考える」と題して、この間の大学改革の流れに対する分野横断的教育の重要性について報告を行いました。それを受けて、現役教員の佐々木重洋文学研究科教授が「分野横断的教育研究の可能性と課題－比較人文学講座16年間の実践から－」と題して、同講座のこれまでの取り組みと課題、今後の展開について報告しました。その後、3名の報告者を中心に討論を行い、新しい人文学研究科の幕開けに向けて今後の展望を議論して、シンポジウムの締めくくりとしました。

モンゴル国立教育大学と比較授業分析共同セミナーを実施

●大学院教育発達科学研究科

大学院教育発達科学研究科は、1月27日(金)から2月2日(木)までの7日間、協定校であるモンゴル国立教育大学が中心となるモンゴル授業研究学会と、教育学部第3講義室において、比較授業分析共同セミナーを実施しました。モンゴル国立教育大学からダンザン・ニヤムジャブ教育研究センター教授、トゥムルバートル・ガンバートル理数学



両国の教育者と研究者が集い、モンゴルの算数の授業を共同分析している様子

部カリキュラム部長、ナツァグドルジ・ナランツォグト理数学部化学研究科長の他、モンゴル教育文化科学スポーツ省からプレブ・ルハグバースレン国家基金理事長らが来学しました。セミナーには、他大学の研究者、教育者も出席し、モンゴルの小学校算数の授業を共同分析し、同研究科で推進している「授業分析」の研究方法をモンゴルの方々とも共有することができました。また、教育改革、授業研究の動向について、相互に発表し、意見交換を行いました。そして、小牧市立小牧原小学校、愛知県立小牧南高等学校、愛知教育大学附属名古屋小学校、本学教育学部附属中・高等学校への訪問調査を行いました。

同研究科は世界的な授業研究の重要な拠点の1つとなっており、来年度には、世界授業研究学会を開催する予定です。また研究科内の組織として「授業研究国際センター」(仮称)設置に向けた準備を行っている上、全学的な組織整備として進められている「アジア共創教育研究機構」においても、他研究科と連携して授業研究のプロジェクトを推進する予定です。モンゴル国立教育大学ならびにモンゴル授業研究学会は、それぞれアジアにおける最も有力な連携先の1つです。

教職を志望する名大生のための「高大接続」セミナーを開催

●大学院教育発達科学研究科

大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センターは、2月27日(月)と28日(火)の両日、それぞれ教育学部棟第3講義室とES総合館ES023講義室において、「教職を志望する名大生のための『高大接続』セミナー」を開催しました。実際に4月から教職に就く学生をはじめ、教職を志望する学生や高大接続改革に関心を持つ教職員の方々の



教育学部棟でのセミナーの様子

参加がありました。

現在、文部科学省が急速に進めている高大接続改革により、2020年には現在のセンター試験を廃止して新たに「大学進学希望者学力評価テスト(仮称)」が導入される予定です。さらにその4年後には、新たな高等学校学習指導要領に基づく発展型のこのテストが導入されます。

高大接続改革とは「高校教育改革」「大学教育改革」「大学入学者選抜改革」の3つの一体的改革で、戦後最大の教育改革とも言われていますが、流動的で不透明な部分が多いのが現状です。

セミナーでは、センター長である大谷 尚教授及び専任教員である阿部英之助特任講師が、改革の背景となる諸答申、社会からの要請、文部科学省の方針、改革の内容などをわかりやすく解説しました。また、今後の高校教育改革、大学教育改革、大学入学者選抜改革について、これから教職に就く、あるいは志望する学生が知っておくべき基礎知識や高大接続に関する情報の解釈の仕方、今後の動向の見守り方について詳しく説明しました。

参加者からは高大接続に関する質問や、意見の発表があり、関心の高さが伺えました。

第4回キャンパス・アジア学生シンポジウム等を開催

●大学院法学研究科

大学院法学研究科キャンパス・アジアプログラムは、3月4日(土)、アジア法交流館アジアコミュニティフォーラムにおいて、「第4回学生シンポジウム」「第1回キャリア形成セミナー」「第7回法学院長・学部長会議」「第15回質保証協議会」を開催しました。同プログラムは2011年に文部科学省の公募事業「大学の世界展開力強化事業」に採択

され、今年度9月には、平成32年度までの継続事業としての採択を受けました。これら一連の行事の目的は、本格的に第二期のプログラムをスタートさせたことにより、これまでの活動を総括し、将来の展望を教員と学生の立場から検討すること、及びキャンパス・アジアのコミュニティを強化し、今後の活動に繋げることです。

第4回学生シンポジウムでは、2015年9月から昨年8月まで日中韓各国で、半年または1年間の留学を経験した各国学生が、それぞれの留学体験を共有するとともに、留学中に得た知見をもとに学術的な報告を行いました。第1回キャリア形成セミナーでは、東アジアで国際的に活躍している弁護士、教員、会社役員の方々とグローバルに活躍したい学生達が報告をし、総合討論にて国際的な活躍の現状に関する学生の理解を深めました。第7回法学院長・学部長会議、第15回質保証協議会においては、同プログラムの日中韓各国の責任者である法学院長、法学部長が本プログラムの成果や今後の課題を報告し、また、今後のプログラムの在り方や方向性について熱い議論を繰り広げました。参加者は、日中韓の教職員33名、学生40名、うち9名は卒業生でした。



記念撮影

テクノ・シンポジウム名大「マルチコプター 2.0時代へ『空の産業革命』を迎えて」を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、2月20日(月)、野依記念学術交流館において、公益財団法人日比科学技術振興財団との共催で、テクノ・シンポジウム名大「マルチコプター 2.0時代へ『空の産業革命』を迎えて」を開催しました。

はじめに、新美工学研究科長からあいさつがあり、その後、千葉大学特別教授である野波健蔵株式会社自律制御シ



本郷飛行機（金田氏（写真右）、此村氏（写真左））による飛行デモ

ステム研究所代表取締役による講演がありました。講演では、ドローンの歴史と現状、そして離島への物資輸送、農業への適用をはじめ、急速に広がるアプリケーションが持つ意味「空の産業革命」について詳しく解説されました。

次に、森 浩一同研究科准教授から、マルチコプターを使った台風観測への挑戦について、ならびに石田敦則三信建材工業株式会社代表取締役から、非 GPS ドローンを使ったインフラ点検に関する講演がありました。

そして、大学院生が立ち上げたベンチャー企業である本郷飛行機株式会社の金田賢哉代表取締役と此村 領研究開発担当からは、空飛ぶパソコンに匹敵する情報処理を可能とした自社機の紹介と飛行デモがありました。また、有志団体 CARTIVATOR の中村 翼代表は世界最小の空飛ぶクルマ SkyDrive の開発と東京オリンピック開会式での採用を目指したロードマップについて講演しました。最後にパネルディスカッションを通じ、次の時代（2.0時代）にマルチコプター・ドローンが切り開く技術、産業と社会について熱心な議論を行いました。

当初予定された豊田講堂前広場での飛行デモは雨天中止となりましたが、141名が参加し、大変盛会となりました。

オハイオ州立大学 TDA と学術交流協定を締結

●大学院情報科学研究科

平成29年度から「情報学研究科」に改組する大学院情報科学研究科は、3月9日(木)、アメリカ合衆国オハイオ州立大学の Thompson Library において、オハイオ州立大学 Translational Data Analytics (TDA) との学術交流協定調印式を挙りました。本学からは松尾総長、新たに情報学研究科長となる村瀬 洋情報学研究科教授（現



調印式の様子

情報科学研究科副研究科長)、武田一哉情報学研究科教授が参加し、TDA のブルース・マクフェロン副学長及びデイビッド・マンダーシャイド副学長、そして総長のあいさつの後、村瀬教授、TDA のデイビッド・ウィリアムズ工学部長、マクフェロン副学長及びマンダーシャイド副学長により協定が調印されました。その後の記念講演会では、総長、ウィリアムズ工学部長、尾池厚之在米日本国特命全権公使、本協定締結の橋渡しである武田修三郎文部科学省参与が講演を行い、村瀬教授は、4月から設置される情報学研究科について紹介しました。次いで、本学からは武田教授が“A Data-Centric Approach to Driving Behavior Research”と題し、また TDA からはロンジュン・シン助教が“Remotely Sensed Imagery for Traffic Data Acquisition and Disaster Responses”、スティーブ・クワイアリング教授が“Modeling the Impact of tropical Storms on Electrical Power Systems”と題して研究に関する講演を行い、同研究科と TDA の共同研究の可能性を示す場となりました。また調印式には、在米日本企業関係者やオハイオ州立大学の学生の参加も多数あり、盛況の内に終了しました。

ICCAE 第7回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、3月13日（月）、農学部第5講義室において、2016年度第7回オープンセミナー「海外農業経営調査の実際」を開催しました。今回は東京農業大学国際食料情報学部の教授で、同センターの客員教員でもある内山智裕氏を招き、講演を行いました。セミナーでは、一口に海外調査といっても、国・



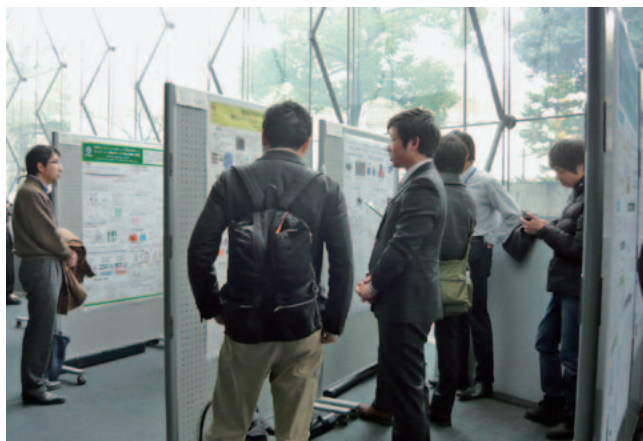
内山教授の講演の様子

地域の違いはもちろん、調査対象も、農家、農業法人、関連企業、政府、非営利組織、研究者など様々であることが述べられました。そして、農業に限らず様々なビジネスが国境を容易に超えるようになった今日では、調査研究活動も、その目的や内容にかかわらず、国境を超えるという現状を踏まえ、イギリス・カナダ・アメリカなどの先進国、また、タイやインドネシアなどの新興国における調査経験や、海外調査の手法から心構えまで、実例を挙げながらの解説が行われました。このセミナーを通して、学内外の参加者とともに海外調査に取り組む際のヒントについて共有することができました。

第6回シンクロトン光研究センターシンポジウムを開催

●シンクロトン光研究センター

シンクロトン光研究センターは、3月2日（木）、野依記念学術交流館において、第6回シンクロトン光研究センターシンポジウムを開催しました。例年は1月に開催していましたが、今年度は愛知県が国の地方創生加速化交付金を受けて実施した、地域イノベーション創出支援事業費補助金による名古屋大学ビームライン BL2S1の成果公開



ポスターセッションの様子

無償利用支援の報告会も兼ねたため3月開催となりました。

シンポジウムは、國枝理事、新美工学研究科長のあいさつに始まり、「放射光科学の広がり」と題して、学内をはじめとする産学の研究者10名から、あいちシンクロトン光センターの8本のビームラインの利用事例を中心に、最新の研究成果と光源加速器の現状や将来計画について講演が行われました。また、今回初の試みとして、講演の間にポスターセッションも実施しました。1時間と短い時間でしたが33件のポスター発表があり、各ビームラインの様々な利用事例を広く紹介する機会となりました。

同センターでは、あいちシンクロトン光センターの各種ビームラインの学内ユーザーの利用支援を行っています。利用のご相談等は下記にお問い合わせ下さい。

office@nusr.nagoya-u.ac.jp

第34回企画展「誇張なきアート —科学記録にみる美」を開催

●博物館



展示ギャラリートークの様子

博物館は、2016年11月5日(土)から2月25日(土)までの間、第34回企画展「誇張なきアート—科学記録にみる美」を開催しました。この企画展では、博物館と附属図書館医学部分館に収蔵されている、江戸から明治時代の博物学やそれ以降の動物学、植物学、医学などの研究の記録を展示しました。その中でも、昔からの基本的な記録方法であるスケッチ(実測図)を中心に、顕微鏡を通した人体組織や海藻の精密画、皮膚病理のろう細工、雪の結晶レプリカなどの研究教育標本も紹介しました。また、植物の自然美を描いたボタニカルアートの作品もあわせて展示しました。

展示活動を充実させるために日本芸術文化振興会の助成金を得て、科学記録のスケッチなどがアートとしても楽しめるような展示の工夫を行ったほか、展示に関連した海藻標本の作製、電子顕微鏡による微化石観察、石器のスケッチ、ボタニカルアート実演といった体験イベントやコンサート、そして展示図録の作成も行いました。

ボタニカルアート実演 「植物を記録する」を開催

●博物館



ピオラを描きながらボタニカルアートの解説を行う東海林氏

博物館では、2月15日(水)及び2月22日(水)の両日、ボタニカルアート実演「植物を記録する」を開催しました。講師の東海林富子先生は、同館友の会において2007年からボタニカルサークルの講師を担当し、東海地方でボタニカルアートの普及の一翼を担っています。15日(水)はスイセンとピオラの花、22日(水)はバラの実と枯れ葉を題材にして、観客の前でボタニカルアートのテクニックを披露しました。下書きは0.5mmのシャープペンを使うことや、筆や紙の選び方、透明水彩絵の具を使用するという道具のイロハから、白色は、紙の色をそのまま残すこと、絵の具の混ぜ方、光の取り方、陰影の付け方など、実際に描きながら説明されました。延べ91名の観客は長年ボタニカルアートを実際に描いている方から、これから始めようと思っている方まで様々おり、「普段、分からなかったことが聞いて良かった」「これから、ボタニカルアートを描きたくなった」などの感想がありました。

第52回地球教室 「鉱物をさがそう!」を開催

●博物館

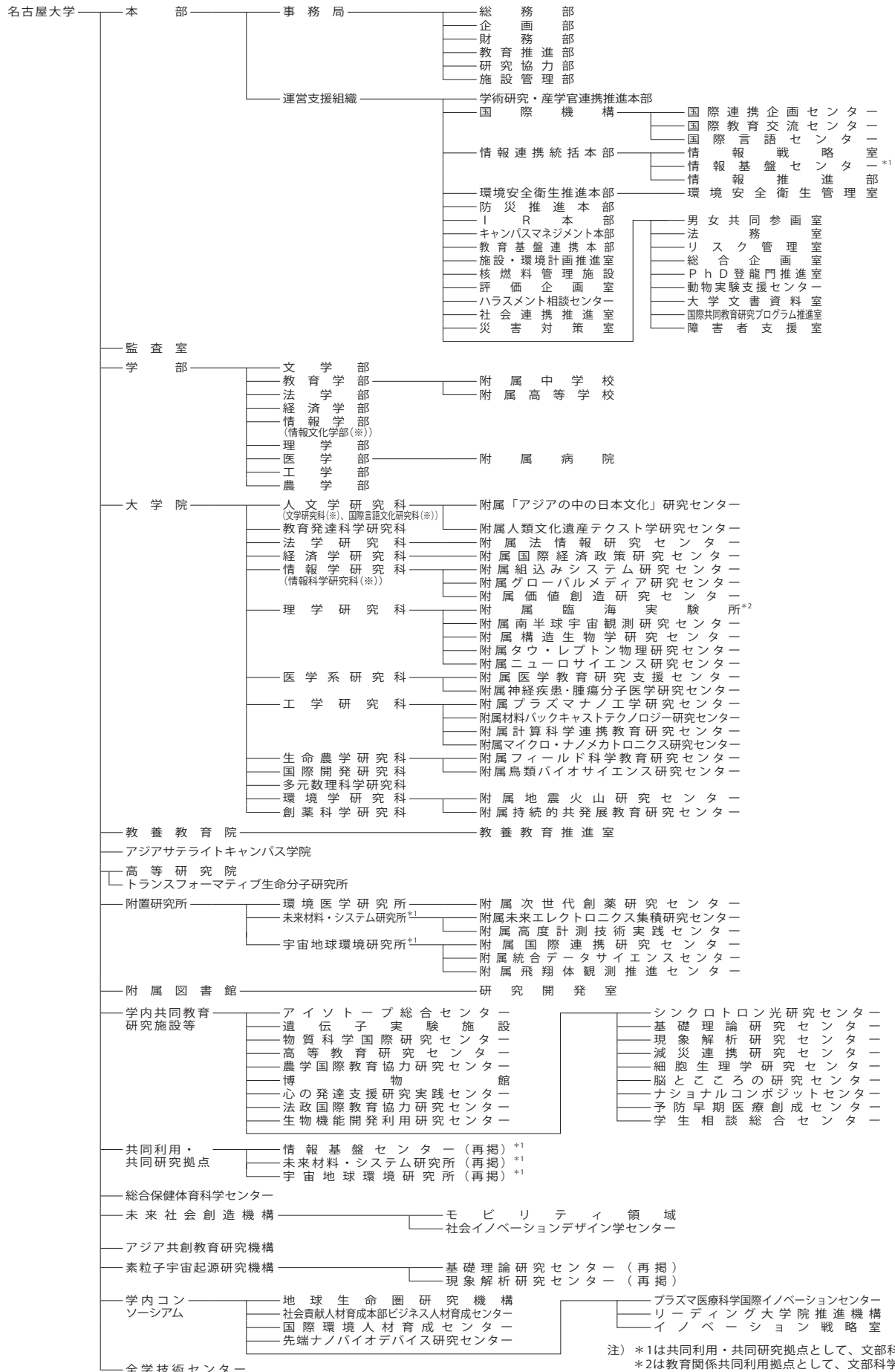


ハンマーを使い鉱物を探す参加者の様子(西尾市の採掘場にて)

博物館は、2月18日(土)及び19日(日)の両日、第52回フィールドセミナー「地球教室」を開催しました。定員数を超える100名以上の応募があり、抽選で選ばれた小学3年生から中学2年生の生徒と保護者、一般の方あわせて32名が参加しました。1日目は、共催の名古屋市科学館において鉱物の観察を行いました。実際の鉱物標本を用い、結晶形や硬度、磁性などの属性を調べて特徴を把握し、最後に鉱物鑑定試験を行いました。2日目は、西尾市三田石材株式会社の許可の下、採石場において鉱物の採集を行いました。参加者は、1日目の座学で養った鑑定眼を頼りに、岩石をハンマーで割りながら自分で鉱物を探しました。次に、蒲郡市生命の海科学館へ移動し、採集されたザクロ石や電気石などを顕微鏡で観察し、それらを用いて簡単なオブジェを作りました。参加者は、自らが発見した小さな自然美を丁寧に観察していました。この事業は、愛知大学名古屋一般教育研究室とも協力しています。

平成29年度名古屋大学組織図

平成29年 4月 1日



(注) *1は共同利用・共同研究拠点として、文部科学省より認定
 *2は教育関係共同利用拠点として、文部科学省より認定
 ※平成29年度学生募集停止

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H28.10.23	植生学会 論文賞	大学院環境学研究科 日本学術振興会 特別研究員 PD	鈴木 康平	
H28.11. 1	WWEC2016, Best Presentation Award	大学院環境学研究科 寄附講座講師	本巢 芽美	
H28.11. 1	Best Poster Award, WWEC2016 Tokyo (15th World Wind Energy Conference and Exhibition)	宇宙地球環境研究所教授	坪木 和久	他 6 名と連名
H28.11. 1	Best Poster Award, WWEC2016 Tokyo (15th World Wind Energy Conference and Exhibition)	宇宙地球環境研究所研究員	加藤 雅也	他 6 名と連名
H28.11.16	Clarivate Analytics, Highly Cited Researchers 2016	大学院生命農学研究科教授	榊原 均	
H28.11.18	第25回ポリマー材料フォーラム 優秀ポスター賞	大学院理学研究科講師	河野慎一郎	
H28.11.25	第31回女性史青山なを賞	大学院国際言語文化研究科 教授	胡 潔	
H28.12. 3	鳥取大学乾燥地研究センター 平成28年度共同研究発表会 乾燥地科学共同研究発表賞	大学院環境学研究科 日本学術振興会特別研究員 PD	鈴木 康平	篠田雅人（大学院環境学研究科教授）と 連名
H28.12.21	第11回わかしやち奨励賞 基礎研究部門 最優秀賞	教養教育院講師	伊藤 英人	
H28.12.22	Award for Encouragement of Research, The 26th Annual Meeting of MRS-J	大学院工学研究科研究員	堤 隆嘉	
H29. 1. 1	IEEE Fellow, The Institute of Electrical and Electronics Engineers	大学院多元数理科学研究科 教授	林 正人	
H29. 1. 9	Life Time Achievement Award, SFRR-india (Society for Free Radical Research)	大学院医学系研究科教授	豊國 伸哉	
H29. 1.27	平成28年度名古屋大学医師会 研究奨励賞	総合保健体育科学センター 講師	岩間信太郎	
H29. 2. 3	井上化学振興財団 第33回井上研究奨励賞	大学院理科学研究科 日本学術振興会 海外特別研究員	八木亜樹子	
H29. 2. 3	HAI シンポジウム 2016 Outstanding Research Award	未来社会創造機構 特任准教授	田中 貴紘	藤掛和広（未来社会創造機構研究員）、 米川 隆（未来社会創造機構研究員）、 他 5 名と連名
H29. 2. 4	第10回善吾賞（ソフトウェアテスト振興協会）	大学院情報科学研究科教授	山本修一郎	森崎修司（大学院情報科学研究科准教授）、 他 2 名と連名
H29. 2. 4	Reviewer of the Year Awards 2016, IOP Publishing	大学院工学研究科准教授	飯田 和昌	
H29. 2. 7	遠山椿吉記念 第 5 回食と環境の科学賞	大学院医学系研究科教授	加藤 昌志	
H29. 2.13	日本遺伝学会 第88回大会 Best Papers (BP) 賞	環境医学研究所准教授	増田 雄司	
H29. 2.14	高エネルギー加速器科学研究奨励会 平成28年度奨励賞 小柴賞	大学院理学研究科准教授	居波 賢二	
H29. 2.16	有機合成化学協会 富士フィルム研究企画賞	大学院工学研究科特任助教	堀部 貴大	
H29. 2.16	有機合成化学協会 和光純薬工業研究企画賞	大学院工学研究科助教	廣戸 聡	
H29. 2.17	日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会 学会賞 最優秀論文	大学院医学系研究科教授	前川 厚子	他 2 名と連名
H29. 2.28	平成28年度日本エネルギー学会賞（学術部門）	未来材料・システム研究所 教授	成瀬 一郎	
H29. 3. 1	第 8 回日本 LCA 学会 功績賞	大学院環境学研究科准教授	加藤 博和	
H29. 3. 1	自動車技術会 2016年秋季大会 学術講演会 優秀講演発表賞	未来社会創造機構 特任准教授	田中 貴紘	
H29. 3. 2	平成28年度赤崎賞	大学院工学研究科助教	廣戸 聡	
H29. 3. 2	平成28年度赤崎賞	医学部附属病院医員	佐藤 和秀	
H29. 3.13	University Medal of University of Freiburg	理事・副総長	國枝 秀世	
H29. 3.17	日本農芸化学会 2017年度農芸化学若手女性研究者賞	大学院生命農学研究科 研究員	加藤 晃代	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H29. 3.17	日本農芸化学会 2017年度農芸化学女性研究者賞	大学院生命農学研究科 准教授	佐藤ちひろ	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H29. 2.17	文部科学省 ナノテクノロジープラットフォーム 平成28年度若手技術奨励賞	未来材料・システム研究所 技術職員	山本 悠太	

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28. 5.14	2016年日語教学と日本学研究国際研討会研究 生学術論壇の発表上獲得第三名	大学院国際言語文化研究科 M2	李 夢迪	
H28. 6.28	NASA Group Achievement Award		MAVEN Science Team	松永和成（大学院理学研究科 D3）、 他289名と連名
H28. 8. 6	第18回応用薬理シンポジウム 優秀演題賞	大学院医学系研究科 D3	祖父江 顕	
H28. 8. 9	Oral Presentation Award, Siberian Cosmology Days 2016	大学院理学研究科 D3	桂川 大志	
H28. 8.20	第三屆中青年漢日対比語言学優秀成果獎	大学院国際言語文化研究科 D3	疏 蒲劍	
H28.10. 5	Best Student Paper Award, ICMU2016	大学院工学研究科 M2	嶋田 光佑	廣井 慧（未来社会創造機構特任助教）、 河口信夫（未来社会創造機構教授）と連名
H28.10. 7	フルオラス科学研究会 第9回シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 D2	スタンフィールド ジョシュア カイル	
H28.10.15	日本建築学会 2016年度日本建築学会大会 (九州) 学術講演会都市計画部門 若手優秀発表賞	大学院環境学研究科 M1	松本 武士	福和伸夫（減災連携研究センター教授）、 他1名と連名
H28.11.11	第55回電子スピサイエンス学会年会 (SEST2016) 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M2	小関 康平	
H28.11.12	陸水物理研究会 第38回研究発表会 (2016年帯広大会) 学生優秀発表賞	大学院環境学研究科 M2	池上 文香	
H28.11.15	日本金属学会東海支部・日本鉄鋼協会東海支部 第26回学生による材料フォーラム 優秀賞	大学院工学研究科 M1	石黒 雄也	
H28.11.30	Student Paper Award, 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2016)	大学院工学研究科 M1	中島 康雄	
H28.12. 1	分子シミュレーション研究会 第30回分子シミュレーション討論会 学生優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	宮崎 裕介	篠田 渉（大学院工学研究科准教授）、 岡崎 進（大学院工学研究科教授）と連名
H28.12. 2	プラズマ・核融合学会賞 2016年度第33回年会 若手学会発表賞	大学院工学研究科 M2	皇甫 度均	梶田 信（未来材料・システム研究所准教授）、 大野哲靖（大学院工学研究科教授）、 河口翔太（大学院工学研究科 M1）と連名
H28.12. 7	HCG シンポジウム2016 オーガナイズドセッション賞	大学院工学研究科 M1	浦野 健太	廣井 慧（未来社会創造機構特任助教）、 河口信夫（未来社会創造機構教授）と連名
H28.12. 8	HCG シンポジウム2016 学生優秀インタラクティブ発表賞	大学院工学研究科 M1	浦野 健太	廣井 慧（未来社会創造機構特任助教）、 河口信夫（未来社会創造機構教授）と連名
H28.12. 8	電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) 2016年度オーガナイズドセッション賞	大学院情報科学研究科 M1	梅澤 侑生	平山高嗣（大学院情報科学研究科特任准教授）、 榎堀 優（大学院情報科学研究科助教）、 間瀬健二（大学院情報科学研究科教授）と 連名
H28.12. 8	日本化学会秋季事業 第6回 CSJ 化学フェスタ 2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	矢崎 啓寿	
H28.12. 8	日本化学会秋季事業 第6回 CSJ 化学フェスタ 2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	宇留嶋彬央	
H28.12. 8	日本化学会秋季事業 第6回 CSJ 化学フェスタ 2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	仲井 崇	
H28.12. 8	日本化学会秋季事業 第6回 CSJ 化学フェスタ 2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	北村 一晟	
H28.12. 8	日本化学会秋季事業 第6回 CSJ 化学フェスタ 2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	起 貞吾	
H28.12. 8	日本化学会秋季事業 第6回 CSJ 化学フェスタ 2016 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	西田 竹徳	
H28.12. 9	AsBIC8 ポスター賞	大学院理学研究科 D2	スタンフィールド ジョシュア カイル	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H28.12. 9	日本トライボロジー学会 第7回トライボロジー秋の学校 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	野田啓一郎	
H28.12.10	第43回有機典型元素化学討論会 優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	赤堀 周平	
H28.12.10	第43回有機典型元素化学討論会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D1	大森 裕土	
H28.12.10	第43回有機典型元素化学討論会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	永田 裕也	
H28.12.10	日本セラミックス協会 東海支部学術研究発表会 優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	田宮 侑	林幸彦朗 (未来材料・システム研究所助教)、 坂本 渉 (未来材料・システム研究所准教授)、 余語利信 (未来材料・システム研究所教授) と 連名
H28.12.15	第6回CSJ化学フェスタ2016 最優秀ポスター発表賞	大学院理学研究科 M1	鈴木 和人	
H28.12.15	第6回CSJ化学フェスタ2016 優秀ポスター発表賞	大学院理学研究科 M1	中森 祥哉	
H28.12.15	第6回CSJ化学フェスタ2016 優秀ポスター発表賞	大学院理学研究科 M1	山田 志歩	
H28.12.15	電気学会 電力系統技術委員会 奨励賞	大学院工学研究科 M2	畠中 良聡	栗本宗明 (大学院工学研究科助教)、 舟橋俊久 (未来材料・システム研究所客員教授)、 加藤丈佳 (未来材料・システム研究所教授)、 他1名と連名
H28.12.16	Young Scientist Poster Award, IPC 2016	大学院工学研究科 M1	川端 賢	
H28.12.16	Young Scientist Poster Award, IPC 2016	大学院工学研究科 M1	北村 一晟	
H28.12.16	Young Scientist Poster Award, IPC 2016	大学院工学研究科 M1	西田 竹徳	
H28.12.18	計測自動制御学会 SI2016優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	池田 遼輔	鈴木教和 (大学院工学研究科准教授)、 社本英二 (大学院工学研究科教授) と連名
H28.12.19	Best Discussion Award, ITbM/IGER Chemistry Workshop 2016	大学院工学研究科 M2	望月 拓哉	
H28.12.21	第26回日本MRS年次大会 奨励賞	大学院工学研究科 M1	山田 翔太	林幸彦朗 (未来材料・システム研究所助教)、 坂本 渉 (未来材料・システム研究所准教授)、 余語利信 (未来材料・システム研究所教授) と 連名
H29. 1. 7	第4回(2016年度)応用物理学会 東海支部 学術講演会発表奨励賞	大学院工学研究科 M2	加藤 祐介	
H29. 1. 7	第4回(2016年度)応用物理学会 東海支部 学術講演会発表奨励賞	大学院工学研究科 M1	伊藤 公一	
H29. 1. 7	第4回(2016年度)応用物理学会 東海支部 学術講演会発表奨励賞	大学院工学研究科 M1	山本 泰史	
H29. 1. 8	電子情報通信学会・電子デバイス研究専門 委員会 平成28年電子デバイス研究会 論文発表奨励賞	大学院工学研究科 M2	秋山 直輝	
H29. 1.13	Annual Reserch Award, Integrative Graduate Education and Research Program in Green Natural Sciences (IGER) Annual meeting 2016	大学院工学研究科 D3	山下 賢二	波多野学 (大学院工学研究科准教授)、 石原一彰 (大学院工学研究科教授) と連名
H29. 1.13	Annual Reserch Award, Integrative Graduate Education and Research Program in Green Natural Sciences (IGER) Annual meeting 2016	大学院理学研究科 D1	大島 豪	
H29. 1.13	Poster Award, Integrative Graduate Education and Research Program in Green Natural Sciences (IGER) Annual meeting 2016	大学院工学研究科 D3	岡本 遼	波多野学 (大学院工学研究科准教授)、 石原一彰 (大学院工学研究科教授) と連名
H29. 1.13	Poster Award, Integrative Graduate Education and Research Program in Green Natural Sciences (IGER) Annual meeting 2016	大学院工学研究科 D3	後藤 優太	波多野学 (大学院工学研究科准教授)、 石原一彰 (大学院工学研究科教授) と連名
H29. 1.13	Poster Award, Integrative Graduate Education and Research Program in Green Natural Sciences (IGER) Annual meeting 2016	大学院理学研究科 D2	吉村 柁彦	
H29. 1.13	Poster Award, Integrative Graduate Education and Research Program in Green Natural Sciences (IGER) Annual meeting 2016	大学院理学研究科 D1	永井 隆之	
H29. 1.17	高分子学会 第28回高分子ゲル研究討論会 優秀演題賞	大学院工学研究科 M2	城地 悠仁	
H29. 1.18	応用物理学会 第34回プラズマプロセッシング 研究会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	古田 凌	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H29. 1.20	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	ベ ハンシン	豊田浩孝 (大学院工学研究科教授)、 鈴木陽香 (大学院工学研究科助教)、 他 3 名と連名
H29. 1.20	電気学会 優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	金原 佑樹	栗本宗明 (大学院工学研究科助教)、 舟橋俊久 (未来材料・システム研究所客員教授)、 加藤丈佳 (未来材料・システム研究所教授)、 他 1 名と連名
H29. 1.20	電気学会 優秀論文発表賞 B 賞	大学院工学研究科 M1	杉野 一樹	
H29. 1.20	平成28年度電気・電子・情報関係学会東海支部 連合大会 IEEE 名古屋支部学生奨励賞	工学部 4 年	岩倉 亮介	
H29. 1.21	電子デバイス界面テクノロジー研究会 安田賞	大学院工学研究科 D1	高橋 恒太	
H29. 1.21	電子デバイス界面テクノロジー研究会 服部賞	大学院工学研究科 D2	グエン チュン スアン	
H29. 1.28	日本古生物学会 優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 D1	浦野 雪峰	藤原慎一 (博物館助教)、他 1 名と連名
H29. 1.31	第14回キャンパスベンチャーグランプリ (CVG) 中部大賞	大学院理学研究科 M2	新居 舜	
H29. 1.31	電気学会 平成28年電子・情報・システム部門 (電気学会 C 部門) 技術委員会奨励賞	大学院工学研究科 D3	森田 圭	加藤丈佳 (未来材料・システム研究所教授)、 舟橋俊久 (未来材料・システム研究所客員教授)、 鈴置保雄 (名誉教授)、他 1 名と連名
H29. 2. 4	第18回東海 3 大学通信系研究室合同修士論文 発表会 優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	佐藤 翔	
H29. 2. 6	Best Paper Award 2016, Synlett	大学院理学研究科 M2	矢野 裕太	
H29. 2. 8	Best Student Paper Award, International Conference on Intelligent Automation and Robotics 2016	大学院工学研究科 M2	セバスチャン コエーテ	栗本宗明 (大学院工学研究科助教)、 舟橋俊久 (未来材料・システム研究所客員教授)、 加藤丈佳 (未来材料・システム研究所教授)、 他 1 名と連名
H29. 2.11	第 9 回 NAGOYA グローバルリトリート 優秀発表賞	大学院医学系研究科 D3	大原 悠紀	
H29. 2.11	第 9 回 NAGOYA グローバルリトリート 優秀発表賞	大学院医学系研究科 D3	祖父江 顕	
H29. 2.16	Honorable Mention Poster Award, SPIE Medical Imaging 2017	大学院医学系研究科 M1	中嶋 愛	
H29. 2.19	日本知能情報ファジィ学会 東海支部 第42回東海ファジィ研究会 優秀発表賞	工学部 4 年	谷崎 悠平	
H29. 2.25	Award of excellent poster presentation, The 8th ICERD	大学院環境学研究科 M2	スーフイハラス ティーパーチャン	林希一郎 (未来材料・システム研究所教授)、 大場 真 (未来材料・システム研究所客員准教授)、 小林 航 (大学院環境学研究科 M1) と連名
H29. 2.25	Investigators Award, Nagoya Chronic Kidney Disease Frontier (第 6 回 CKD-Frontier)	大学院医学系研究科 D3	菱田 学	
H29. 2.25	Investigators Award, Nagoya Chronic Kidney Disease Frontier (第 6 回 CKD-Frontier)	大学院医学系研究科 D2	蜂矢 朝香	
H29. 3. 2	フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会 若手奨励賞	大学院工学研究科 M2	牛山 拓也	
H29. 3. 3	電子情報通信学会東海支部 平成28年度卒業研究発表会 ポスター発表部門 最優秀卒業研究発表賞	工学部 4 年	丸山 功貴	
H29. 3. 3	電子情報通信学会東海支部 平成28年度卒業研究発表会 口頭発表部門 優秀卒業研究発表賞	工学部 4 年	前島 悠人	
H29. 3. 5	第 6 回サイエンス・インカレ ポスター発表部門 国立研究開発法人科学技術振興機構理事長賞	医学部 4 年	垣原美紗樹	
H29. 3. 8	第 7 回 (平成28年度) 日本学術振興会 育志賞	大学院理学研究科 D3	伊藤 亜実	
H29. 3. 8	第 7 回 (平成28年度) 日本学術振興会 育志賞	大学院創薬科学研究科 D3	志甫谷 涉	
H29. 3.11	Linked Open Data チャレンジ2016 ビジュアルライゼーション部門 優秀賞	大学院情報科学研究科 M2	服部 洋明	兼松篤子 (大学院情報科学研究科研究員)、 遠藤 守 (大学院情報科学研究科准教授) と連名
H29. 3.13	日本音響学会 東海支部 優秀発表賞	大学院情報科学研究科 M2	後藤 太一	武田一哉 (大学院情報科学研究科教授)、 竹内栄二郎 (大学院情報科学研究科准教授)、 宮島千代美 (未来社会創造機構特任准教授) と連名
H29. 3.13	日本音響学会 東海支部 優秀発表賞	大学院情報科学研究科 M2	関 翔悟	武田一哉 (大学院情報科学研究科教授)、 戸田智基 (情報基盤センター教授) と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授などゆかりのノーベル賞受賞者の業績を伝える施設を、愛知県と名古屋市が整備する	2.16 (木)	読売
2 第36回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会で初優勝した日本郵政グループ女子陸上部が優勝報告会を開き、同主将鈴木亜由子氏本学卒業生は「優勝で注目度が高まり、本当の実力を問われるのはこれから」と語る	2.16 (木)	毎日 (朝刊)
3 豊田章一郎全学同窓会会長らが訪れ、取り壊す方針だったトヨタ創業時に最初の試作車が造られた愛知県刈谷市の元工場建屋の保存が決まった	2.17 (金)	中日 (夕刊)
4 愛知県が本学や財界とともに開設する産学官による研究事業拠点「あいち・なごや強靱化共創センター」で家屋被害認定土を育成する	2.17 (金)	中日 (朝刊)
5 減災館の来場者が4万人に達し、15日に記念式典を開いた	2.17 (金)	中日 (朝刊)
6 日本平和学会全国巡回シンポジウム開催：18日 池内 了本学名誉教授が講演	2.17 (金)	中日 (朝刊)
7 ハッピーママフェスタ：私たちが子どもを守る スザンヌさんと「防災」考える座談会 名古屋市港防災センター長大場玲子氏本学農学博士	2.17 (金)	中日 (朝刊)
8 スーパー KEKB 年内にも衝突実験 KEKB 加速器が「小林・益川理論」を実験で検証したことが取り上げられる	2.17 (金)	日刊工業
9 後藤寛貴生命農学研究科特任助教らの研究グループがクワガタムシの大顎を形作る遺伝子を特定	2.18 (土)	中日 (朝刊)
10 生源寺眞一生命農学研究科教授は17日に行われた最終講義で「農業経済学は謙虚でなければならない。傲慢な学問を振りかざしてはならない」と語る	2.18 (土)	中日 (朝刊)
11 水田 洋本学名誉教授が代表世話人を務める「あいち九条の会」が、18日に「結成12周年の集い」を開いた	2.19 (日)	中日 (朝刊)
12 医師の目：高齢者 体重減なら衰弱注意 葛谷雅文医学系研究科教授	2.19 (日)	日経 (朝刊)
13 カーボンナノチューブの発見 新素材が持つ可能性 飯島澄男本学特別招へい教授	2.20 (月)	中日 (夕刊)
14 この人：大同大学の学長に就任する神保睦子氏本学博士課程修了	2.20 (月)	中日 (朝刊)
15 天野 浩未来材料・システム研究所教授が中心となり本学やトヨタ自動車株式会社など、64の大学や企業などで構成するコンソーシアムは、窒化ガリウムの実用化に向けた行程表をまとめた	2.20 (月)	日経 (朝刊)
16 本学は、産学共同研究に携わる大学院生に年約300万円を払う方針を決めた	2.20 (月)	日経 (朝刊)
17 アレルギー2人に1人が罹患 増加の傾向 皮膚炎は倍 安全量 食べて楽しんで うりすクリニック名誉院長宇理須厚雄氏本学卒業生	2.20 (月)	毎日 (朝刊)
18 キャンプの街 応援する宿 名大生、休学し起業 奥田慎平さん農学部3年生がオープン	2.21 (火)	毎日 (夕刊)
19 第34回博物館企画展「誇張なきアートー科学記録にみる美」開催：1月31日～2月25日	2.21 (火)	朝日 (夕刊)
20 ナビゲーター：エコカーの本命 PHV トヨタ自動車株式会社社長内山田竹志氏本学卒業生	2.21 (火)	日刊工業
21 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は残業時間の上限規制に関し、繁忙期は月100時間まで認めるのが望ましいとの考えを示した	2.21 (火)	中部経済
22 本学と名古屋証券取引所、日本公認会計士協会東海会は、大学発ベンチャー企業を支援する共同研究を開始し、松尾総長は「この地域がイノベーションを起こしやすいということになれば、21世紀の未来社会で一層輝く」と語る	2.21 (火)	日刊工業 読売
23 グローバル時代をひらく：トランスフォーメティブ生命分子研究所 ビジョン ワクワク感求め 研究者が集まる 伊丹健一郎同教授	2.22 (水)	日経 (朝刊)
24 ザ・科学遺産 医学編①：経路人形 お手本示す鍼灸教材 医学部史料室	2.23 (木)	中日 (夕刊)
25 クルマ革命 (第1部) 自動運転の衝撃⑤：技術先行 追う社会 本学の自動運転の研究が取り上げられる	2.23 (木)	中日 (朝刊)
26 ものづくり最先端：本学がAIを組み込んだ自動運転の研究を急ぎ、二宮芳樹未来社会創造機構特任教授は「住民の生活を支えるためにも、自動運転の早期実現が必要だ」と語る	2.24 (金)	読売
27 考える広場：地方自治の核心とは - 沖縄と福島から - 国と対等 民意聞け 滋賀大学名誉教授宮本憲一氏本学卒業生	2.25 (土)	中日 (朝刊)
28 本学で平成29年度名古屋大学入学試験2次試験前期日程が始まった	2.25 (土)	日経 (夕刊) 他2社
	2.26 (日)	読売 他2社
29 マナビバ：プラズマ科学 世界の産業支える 堀 勝未来社会創造機構教授	2.26 (日)	中日 (朝刊)
30 あいち環境塾オープン講座開催：3月12日 東山キャンパス ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーで行われる	2.26 (日)	中日 (朝刊)
31 医師の目：「年を取る」って楽しくもある 葛谷雅文医学系研究科教授③	2.26 (日)	日経 (朝刊)
32 本学の入試問題解答例 出題分析	2.26 (日)	中日 (朝刊)
	2.27 (月)	中日 (朝刊)
33 本学が「ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」を今秋に開館することが取り上げられる	2.27 (月)	中日 (朝刊)
34 発掘！イグ・ノーベル賞 (12)：名古屋大学 自動運転をゲーム化 石黒祥生未来社会創造機構特任准教授	2.27 (月)	日刊工業
35 一般社団法人未来マトリクス「学生によるイノベーションの事例紹介」を開催し宇治原 徹未来材料・システム研究所教授は「アイデアがイノベーションの起点になっている。そのシーズを企業の技術でサポートできれば、企業のビジネスに役立つ」と語る	2.27 (月)	中部経済
36 中日新聞「リンクト」：HUMAN'S EYE 未来の設計図を 松尾総長	2.28 (火)	中日 (朝刊)
37 まちづくりから減災を考えるシンポジウム～未来の子どもたちに残すもの～開催：27日 産官学フリーディスカッションパネリスト 福和伸夫減災連携研究センター教授	2.28 (火)	中日 (朝刊)
	3.11 (土)	中日 (朝刊)
38 時のおもり：終末時計が30秒進む 核戦争勃発 人類に警告 池内 了本学名誉教授	3. 1 (水)	中日 (朝刊)
39 叙位叙勲：従四位 丹生 潔本学名誉教授	3. 1 (水)	中日 (朝刊)
40 本学に株式会社パロマが内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチ Xi」を寄贈する	3. 1 (水)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
41 本学と国立がん研究センターは、卵巣がんの細胞が腹の中を覆う腹膜にばらまかれたように広がる「腹膜播種性転移」の仕組みを解明した	3. 1 (水) 3. 2 (木) 3. 6 (月)	日刊工業 朝日 (朝刊) 日経 (朝刊)
42 日本経済団体連合会加盟企業の会社説明会などの採用活動が1日解禁され、本学も面接対策の講座を開いたり、ブランク企業対策としてOB・OG訪問をするよう勧めている	3. 2 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
43 ザ・科学遺産：医学編② 人体発汗天秤 生理学 未墾の領域開く	3. 2 (木)	中日 (夕刊)
44 DOCTOR が薦める名医：石川哲也医学系研究科教授 B型肝炎の完治に道筋を 目標は免疫治療方法確立 愛知医科大学特任教授岩堀祐介氏の紹介	3. 2 (木)	中部経済
45 名大ベンチャー：リケジョ発 ビジネス開花 野元美佳さん理学研究科博士後期課程生が自分のために考えた合成短縮の方法が評判を呼び、ビジネスに発展	3. 3 (金)	中日 (朝刊)
46 教育学部附属中学・高等学校長に中嶋哲彦教育発達科学研究科教授を選出	3. 3 (金)	中日 (朝刊)
47 東山キャンパスで人事院中部事務局が「一般職各府省合同業務説明会」を開く	3. 3 (金)	中日 (朝刊)
48 医学部附属病院は電子カルテなどの記録形式を統一し、院内で共有できるシステムを来年1月に導入する	3. 4 (土)	中日 (夕刊)
49 平成28年度赤崎賞：佐藤和秀医学部附属病院医員、廣戸 聡工学研究科助教	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
50 のよりサロン：「女性の社会参画」新たな価値観創造 期待 野依良治本学特別教授が本学学生と議論を交わす	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
51 中日文化センター特別講演会「カーボンナノチューブの発見」開催：20日 飯島澄男本学特別招へい教授が講演	3. 4 (土)	中日 (朝刊)
52 後 房雄法学研究科教授は豊洲市場の移転をめぐる問題で記者会見した元東京都知事石原慎太郎氏について「自分に責任はないとだけ言いたい会見だった」語る	3. 4 (土)	日経 (朝刊)
53 本学がジェンダー問題をテーマとする図書館と中心とした研究施設「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」を10月に開館すると発表	3. 4 (土) 3.13 (月)	読売 中日 (朝刊) 毎日 (夕刊)
54 2016年永井科学技術財団賞：学術賞 竹中康司工学研究科教授、奨励賞 清水克俊経済学研究科教授、山本徹也工学研究科准教授、研究奨励金 入澤寿平工学研究科助教、原 光生工学研究科助教、山下誠司工学研究科助教	3. 4 (土) 3. 6 (月)	中日 (朝刊) 日刊工業
55 病院の実力：災害拠点病院 本学が取り上げられる	3. 5 (日)	読売
56 時事雑感：ダブルネットワーク 中日本高速道路株式会社代表取締役社長 CEO 宮池克人氏本学卒業生	3. 6 (月)	中部経済
57 中村寿一氏・豊田喜一郎氏顕彰像献花式開催：豊田章一郎全学同窓会会長が銅像に献花	3. 6 (月)	中部経済
58 天野 浩未来材料・システム研究所教授と物質・材料研究機構理事小出康夫氏本学卒業生の共同研究施設「天野・小出共同研究ラボ」の開所式が行われた	3. 7 (火)	中日 (朝刊)
59 第8回中部の未来を考える会：IoTで社会変革 討論 コーディネーター 安田孝美情報科学研究科教授	3. 7 (火)	中日 (朝刊)
60 医学部附属病院に株式会社パロマが内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチ Xi」を寄贈し、贈呈式が行われた	3. 7 (火)	中日 (朝刊) 読売
61 宇宙開発 新市場へ協力を 米国マンスフィールド財団が本学で「安倍・トランプ時代の日米宇宙協力」と題し公開セミナーを7日に開催	3. 8 (水)	日経 (朝刊)
62 石上雅敏医学部附属病院講師、伊藤隆徳同大学院生らのグループは、劇症肝炎の治療に効果を発揮する二つのタンパク質を特定	3. 9 (木)	中日 (朝刊)
63 オープンレクチャー2017開催：20日	3. 9 (木)	中日 (朝刊)
64 災害発生後の早期復旧に向けて、企業や行政、インフラ・ライフライン事業者の連携を考えるシンポジウムが8日に開かれ、福和伸夫被災連携研究センター教授がコーディネーターを務めた討論会も行われた	3. 9 (木)	中日 (朝刊)
65 本学と豊田市の「旭木の駅」が提携し、木材利用の拡大に乗り出すことになり、佐々木康寿生命農学研究科教授は「山里の活性化支援のため、木の駅の間伐材活用をさらに推進したい」と語る	3. 9 (木)	読売
66 第13回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会開催：16日 新居 舜さん本学大学院生、鈴木雄也さん本学学生が出場	3. 9 (木)	日刊工業
67 本学の平成29年度前期日程入学試験の合格発表があった	3. 9 (木) 3.10 (金)	朝日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 中日 (朝刊)
68 祖父江元医学系研究科特任教授、石垣診祐同寄附講座助教らのグループは前頭側頭葉変性症がFUSの機能不全で発症する可能性が高いことを突きとめた	3.10 (金)	朝日 (朝刊)
69 天野 浩未来材料・システム研究所教授が10日に上海の日本人学校で講演した	3.11 (土)	中日 (朝刊)
70 中日新聞を読んで：岐路にある大学と学問 愛敬浩二法学研究科教授	3.12 (日)	中日 (朝刊)
71 グローバル愛's：トマドイ 自信持って話して イーゴリ・ダツェンコさん本学大学院生	3.12 (日)	中日 (朝刊)
72 本学や東京大学の研究チームは、マグニチュード9級の南海トラフ巨大地震が起きた場合、広域避難を余儀なくされる世帯が最大で約145万6000世帯に達するとの試算をまとめた	3.13 (月)	読売
73 医学部附属病院は血液製剤「フェブリノゲン」などを投与されC型肝炎ウイルスに感染したとされる薬害について自主的に調査していると報じられる	3.14 (火)	中日 (朝刊)
74 日本数学コンクールフォローアップセミナー「数理ウェーブ」開催：18日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「分割と配置の数理」をテーマに講演	3.14 (火)	中日 (朝刊)
75 本学のキャンパスに設置するウッドデッキが豊田市の「旭木の駅」で集荷した間伐材を使い進められている	3.14 (火)	読売
76 名城大学光デバイス研究センター新設記念シンポジウム開催：27日 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授が出席	3.15 (水)	中日 (朝刊)
77 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生 仕上げの1年	3.15 (水)	日経 (夕刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月16日(木)～5月31日(水)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール
時 間：9:00～20:00 (平日)
(3/21～31は17:00)
13:00～17:00 (土曜日)
休 館 日：日・祝日、3月25日
入 場 料：無料

附属図書館医学部分館ミニ企画展

「帝国大学へあと一步－官立名古屋医科大学の八年－」

内 容：医学部史料室（附属図書館医学部分館4階）に所蔵する史料の中から、官立名古屋医科大学時代（1931-1939）の教育、研究、診療、そして名古屋帝国大学創設に関連する図書、写真などを展示公開する

[関連特別講演会] (5/18)

場 所：医学部附属病院基礎研究棟1階会議室2
時 間：14:00～15:30

講演題目：「医育統一・インチキ学校征伐・官立医大不振－医育の1930年代－」

講 演 者：吉川卓治（教育発達科学研究科教授）

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505



3月14日(火)～7月8日(土)

場 所：博物館2階展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日および夏季休暇期間
(6月11日臨時開館)
入 場 料：無料

第23回博物館特別展「球状コンクリーションの謎－化石永久保存のメカニズム」

内 容：日本や世界各地の球状コンクリーションとともにその研究の最前線について紹介する

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



4月3日(月)～7月7日(金)

場 所：博物館野外観察園
セミナーハウス2階
時 間：10:00～16:00
休 館 日：土・日・祝日
(6月10日、11日臨時開館)
入 場 料：無料

**博物館野外観察園セミナーハウス サテライト展示
「名大キャンパスの野鳥」**

[関連企画]

「キャンパス探鳥会」(4/29) ※雨天順延(予備日は5/6)

場 所：東山キャンパス

時 間：9:00～11:00

参 加 費：50円(保険料)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



4月21日(金)

場 所：文系総合館7階カンファレンス
ホール
時 間：15:00～17:30
対 象：本学および近隣の大学関係者
参 加 費：無料

**高等教育研究センター 第140回招へいセミナー
(第1回アドミッション担当教職員支援セミナー)**

講演題目：「大学入学者選抜における共通試験の現状と課題」

講 演 者：大塚雄作氏（大学入試センター教授）

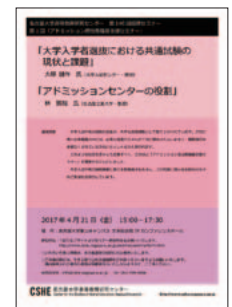
講演題目：「アドミッションセンターの役割」

林 篤裕氏（名古屋工業大学教授）

講演概要：大学入試や高大接続の改革が大きな政策課題として取り上げられている中、これに携わる教職員が必要な知識やスキルが十分に提供されないままに職務遂行を余儀なくされている状況を改善することを目的とする

[問い合わせ先]

高等教育研究センター
教授 夏目 達也 052-789-5696



名大トピックス No.287 平成29年4月17日発行

編集・発行／名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、受賞の掲載、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2699 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>) でもご覧いただけます。

表紙

学内カフェで会話を楽しむ
留学生ら
(平成29年3月8日)



180 宇宙地球環境研究所（後編）— 附置研究所の歴史③ —

2015(平成27)年に宇宙地球環境研究所に統合された教育研究組織のうち、地球水循環研究センターは、2001年までは名大の附置研究所でした。

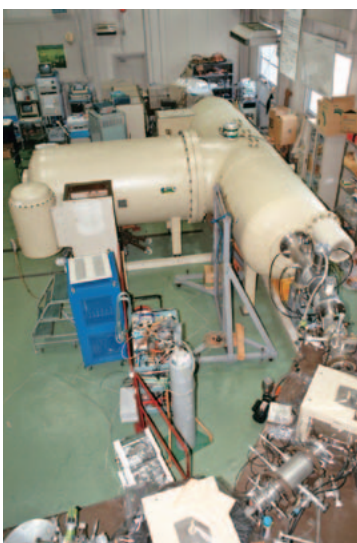
その前身になったのが、1957(昭和32)年4月に設置された、無機化学に関する1部門からなる理学部附属水質科学研究施設です。初代施設長には、施設設置のきっかけとなった、水の学際的な基礎研究所案を1956年の理学部教授会に提出した、菅原 健教授が就任しました。

その後、研究部門を順次増設し、1966年度には5部門とするとともに、当初からの構想である研究所への発展をめざして、学内での検討が進められました。そして1973年9月、水質科学研究施設が理学部から独立する形で、「水圏科学研究所」が附置されたのです。研究所の教官は、引き続き理学研究科の大学院教育を担当しました。研究部門は、設置当初は5部門でしたが、1981年には7部門まで拡充されました。

水圏科学研究所は、1993年4月に水循環部門・物質循環部門・総合解析部門の3大部門へと改組され、「大気水圏科学研究所」となりましたが、2001年3月に廃止されました。所属教官は、同年新設の地球水循環研究センター・大学院環境学研究科などに移りました。

年代測定総合研究センターは、1990年6月に年代測定資料研究センターとして設置されました。同センターは、 ^{14}C （炭素14）によって年代を測定するタンデトロン加速器質量分析計を用いた研究を行う加速器年代測定室と、文系理系を問わない各分野の収蔵資料を研究・公開し、将来の大学博物館をめざす古川総合研究資料館（現在の古川記念館）からなっていました。

2000年4月に同センターを改組し、年代測定総合研究センターと博物館が設置されました。現在、年代測定総合研究センターは、宇宙地球環境研究所年代測定研究部へ移行しています。



1	2	3
4	5	

- 1 建設中の理学部附属水質科学研究施設棟（1970～71年頃）。まもなく水圏科学研究所がこの建物を引き継ぎ、その後増築や別棟の新築等が行われた。大気水圏科学研究所の廃止後は、地球水循環研究センターが使用した。現在は、環境共用館（大学院環境学研究科）となっている。
- 2 水圏科学研究所によるネパール・ヒマラヤ氷河学術調査（1982年）。
- 3 水圏科学研究所による海洋観測（『名古屋大学概要 平成2年度』の写真）。
- 4 タンデトロン加速器質量分析計1号機。タンデトロンは、1982年に学内共同利用設備として設置された（アイソトープ総合センター敷地内）。1997年には、同2号機が完成した（現在の古川記念館内）。
- 5 古川総合研究資料館の展示室。